

熱獄島

伊豆諸島の外れにあるこの島に簡単な船着場が儲けられたのは最近のことである。ここ数年の話だろう。嵐を避けるために島影に回りこんだ漁船が初めて気がついたのがちょうどその頃だ。無人島だとばかり思いこんでいたが、奇妙なユニホームを着た連中が住みついているらしい。しかし緊急避難の時はともかく、それ以外にここを立ち寄ろうとするといいい顔はされない。なぜならここは島ごと私有地なのだ。東京のある団体が買い上げたのだ。

彼らが何のためにこんな水もない島を買ったのか、誰も知らない。島を覆う熱帯特有のジャングルの奥に何が作られているのか、囁かれるのは根拠のない噂ばかりだ。新興宗教が共同体生活を営んでいるとか、右翼が武闘訓練をしているとか、いや、あの島には実は意外な鉱脈が眠っていて商社がそれに気づいたのだとか、そんなところである。

燃料や水分の補給に来たのだろう、時折、白い高速船がその島から出ていくところを発見される時がある。なぜ出ていくところなのかというと、その高速船は決まっ

て明け方早くに島を出ていくので漁に向う漁船の目撃する具合となるのだ。つまり高速船は深夜島に入港しているということになる。だから来たところは誰にも見られない。偶然そうなるのか、故意にそうしているのか、これまた誰にもわからない。本当に積み荷が水や燃料なのかも実は誰にもわからないのだ。

今朝もまた漁場に向う漁師たちは東京方面に針路を取っているあの洒落た外国映画にでも出てきそうな白い高速船を発見して噂話に花を咲かせるに違いない……。

好本ゆみが閉じこめられていた船倉から引きずりだされたのはその一時間前くらいになる。

「どこへ連れていくのよ！」

ガムテープは外されていた。船の中なのだ。どんなに大声を出そうと心配ないとの判断なのだろう。あてみと空手チョップで気絶させられてからどのくらい時間が経ったかわからないが、真っ暗な船倉で彼女は気がついた。向うが猿轡の必要性を認めていない以上騒いでも無駄であると判断し、動きを待った。

ようやくドアが開かれ、また邪険に腕を掴まれて引きずりだされたのだ。

ゆみは矯正士なる、訊いた覚えもない資格を名乗る男を睨みつけた。

「こんなことをして赦されると思っているのっ」

男はそれに答えず、ゆみの腕を背中にねじり上げた。

「い、痛いッ」

美貌を歪めるゆみ。しかし男はさらに彼女のロングヘアを荒々しくわし掴んで抵抗を封じる。本土とは比べものにならない激しい扱いである。

「ひどいわ、離して」

すだれのように顔面を覆う黒髪の間からピンク色の歯茎と白い歯をイッと剥きだしてゆみは叫んだ。自由な手で頭髪を掴んでいる男の手をどけようとするが徒労だった。

彼女はそのまま強引に下船させられた。夏至間近とはいえまだ闇が支配していたが、木造の粗末な棧橋にしている裸電球が辺りを照らしている。

そこには四人の男女が出迎えていた。男が三人と女が一人。皆、ゆみを連行してきた彼らと同じユニホームを着ている。男たちはゆみに一瞥をくれただけでボートに乗り、荷を上げ始めた。

「新入院生を連れてまいりましたっ」

ゆみを拘束してる男が女に向かって報告した。彼女の方が上司なのらしい。

女は四十代後半か、あるいは五十代に届いているかもしれない年齢だろう。ずんぐりとした肥満体で、目も鼻も顔の肉に埋まっている。髪をひつつめにしているので、余計、丸顔が目立つ。

手にした書類——ゆみの履歴が書かれているらしい

——に眼を落としながら女は言った。

「好本ゆみ星饒女子学園三年生。住所……、間違いないね？」

何か容疑者の取り調べのようだ。補導された警察での尋問の際と同じで不快である。

「あ、あなた方はいったい何の権限があってこんな真似をするんですっ」

ゆみは頭髪を乱暴に揺さ振られながらも抗議する。

女はそれには答えず、先程の質問を繰り返す。鷹揚の乏しい冷たい声である。ゆみも意地になって答えず抗議を続ける。

「こんなの違法よ。人権蹂躪だわ、あッ、うう……」

背後に取られていた腕をさらに高くねじ曲げられたのだ。関節が折れそうなほど痛い。自然に腰が曲がり、頭が下がる。

「もう一度しか聴かないよ。好本ゆみ本人だねっ」

「そ、そうよ……」

腕が少し緩められた。頸を振って貌にかかった黒髪を払い、ゆみは唇を噛み締めながらあごを上げた。その瞳は憤怒に燃えている。

「好本ゆみ、過激な思想に染まり、善良な生徒をたぶらかして集団的破壊活動を扇動し、学校の秩序を混乱に陥れたということね。それで学校も親も手に余ってうちに回されてきた……」

権藤が書いたのであろう報告書を女は楽しそうに読み上げている。

「ま、典型的な暴力生徒ね」

「違うわっ」

「あら、何が違うの？」

「すべてデタラメだわ。私が破壊活動を扇動したことも、私がここにいることも！」

喋っているうちに昂奮してきたのか、ゆみは頬を紅潮させて声を荒らげる。

「だからこんな暴力を受ける謂れはないんだわ。いいえ、もしあなた方の言っている話が本当だとしても、誘拐同然の真似が赦されるわけがない。そんな権限は誰にもないはずよ」

「権限？ 何を言ってるのよ。ちゃんと親の同意は得てあるんだから、あるに決まってるだろ」

「私は同意してないわっ。それに母だってこんな暴力行為を見れば、絶対に……」

女はそれを訊いて弾かれたように笑いだした。

「不良学生の更正にいちいち本人の同意を必要としていたら、何ができるといふのよ。泥棒を刑務所に送るのに泥棒の意見を聴く人間なんていないでしょう」

「だから、私は不良なんかじゃないわっ」

「お黙り！」

女は書類の紙でゆみの横貌を張り、そしていきなり彼

女の胸をわし掴んだ。

「まともな女子校生がこんなはしたない格好をしているわけがないだろうが！ ノーブラで乳首勃たせてりゃ、男が色目を使ってくることくらい、わかった上で挑発してるんだろ、このアバズレ！ これが不良でなくてなんなのよ！ え？」

鼓膜が痺れるような罵声を浴びせられ、しかも胸をグリグリ潰される。同性からのこのおぞましい行為もさることながら、女の素性がはっきりとわかるような低劣な言動にゆみはハツとする。自分がどんな所に連れてこられたのか、今更ながら思い知らされた気がした。ここは更正施設でもなんでもないし、彼らや彼女は指導教官などといった高邁な代物ではないのだ。送りこまれてくる院生を囚人まがいに暴力を前面に押し立てて自分たちに従わせることにだけ地道を上げる変態収容所の監守たちにすぎないのだ。

陰湿で狡猾だが、一応世間的な大義名分に気を使う権藤たちのやり方とは違う、直接的で野蛮な掟がこの隔絶された島にまかり通っているのだろう。

「フフ、なんだい、その貌は。この島の流儀が少しは飲みこめたって貌だね。そうさ、ここでは本土のやり方は通用しないんだよ。人権なんてたいそうなものは、真面目に勉強しているおとなしい子供にだけあるものなんだ。間違ってもお前みたいな不良には認められないもの

なのさ。いたらない子供を監督矯正するのが大人の役目。それもその子供の個性にあったやり方でね。お前のような生意気で狂暴なガキには少々手荒な指導を心がけたほうがいいってものなのさ」

女は低い丸っこい鼻を蠢かせながらバストを掴む手に力をこめる。

「ウムムッ——」

ゆみは眉間に苦悩の皺を刻んで呻いた。

「おっと忘れてた、自己紹介が遅れたね。あたしは曳地千江子ってんだ。矯正士長の曳地千江子。いつもは曳地先生とお呼び。さ、わかったらさっさと荷物を運ぶんだ。肉体労働も修業のうち、甘やかしはしないよ！ お前はビシビシ、シゴくことに決めたからね！」

曳地千江子は太い短い指の手でゆみの太腿をバシッとしばきあげ、あごをしゃくる。その先にはボートから下ろされたポリタンクや段ボール箱が積まれているリヤカーが数台並んでいた。

ゆみはその中でも最も重そうな一台をあてがわれた。半楕円の把手に身体をくぐらされる。

「日が明ける前に校舎に運びこむんだ。なーに、どうせ狭い島の中だ。たいした距離じゃない。この逞しい腿だったら心配いらないだろ」

そう言って千江子はもう一度ゆみの脚を叩いた。低い笑い声が男の矯正士たちの間から漏れ響く。

スポーツ万能で体力には自信のあるゆみだが、荷の積まれたリヤカーを引くなど経験もないので重労働である。なだらかに傾斜した栈橋を下り、樹木を伐採しただけの悪路に出ると、すぐさま難渋してしまう。両手でアームを握り、下腹に食いこませて上半身を前傾させ、一步一步脚を踏みだす。道は崩れやすい土が剥き出しており、タイヤが沈みこんでなかなか進まない。それに随所に巨きな石が転がって、行く手を阻む。ゆみはあっという間に汗だくになった。

すぐ前を千江子が歩いている。後から男性矯正士たちが残りのリヤカーを押してくる。両側は鬱蒼とした密林だ。蚊や蠅がぶんぶん飛び回っていて、女子校生の汗を吸いにたかってくる。道は昇り道だ。蛇行しながら島の中央部へと昇っていつているのだろう。

突如、背後で汽笛が鳴らされた。ジェットボートが岸を離れたのだ。

振り向くと東の空が白々と明け始めている。

けたたましい鳥の声が森の奥から聴こえてきた。

島が目覚めようとしている。

ゆみはゼイゼイ荒い息を弾ませる。故意にその喘ぎを高め、スピードを緩めた。一瞬、千江子との距離が開いた。

その隙を見透かしたように、ゆみはさっと身を屈めてアームをくぐり抜けると、飛ぶように右の樹林へ駆け出

した。

「こらっ、お待ち！」

気づいた千江子が伸ばした腕を寸でのところでかいくぐり、ゆみは長い髪を翻して闇のなかへ溶けこんでいった。

「止まれっ、戻りなさい！ 脱走は嚴重処分だよ！」

金切り声を上げるものの、千江子には緊張感がまるでなかった。男たちもゆみが飛びこんでいった所に集まり目を凝らしているが追おうとする気配はない。

一人の男が苦笑しながら千江子に近づいてきた。千江子に報告を行なったあの男だ。胸のポケットから煙草を取り出した彼女にさっとライターを差し出し、

「さっそくやらかしましたね。噂どおりのジャジャ馬だ。素直にリヤカー引いてると思ったらこういう魂胆だったわけですか」

「まあ、いいじゃないか。みんな、ここんところ退屈してたんだし、いい娯楽になるよ、この狩りは。狐の方も賢くてすばしっこそうだからね。ちょっとは楽しませてくれるだろうよ」

千江子はうまそうに煙を吐きながら薄ら笑いを浮かべている。

「ま、葵よりも身は軽そうだし……そろそろ、校舎にいったみんなを連れてくるんだ」 男に命じ、自分は一歩前へ踏みだして、森へ、森に潜んでいるゆみに聞こえ

るような大きな声で言うのであった。

「聴こえるだろう。ゆみ！ 逃げたきゃ気が済むまでお逃げ！ だけど気を抜くんじゃないよ。ここは都会と違って大自然の真っ只中だ。油断すると怪我をするからね。あたしはそいつが心配さ。なぜって、怪我をされたらこの落とし前をつけさせるのを延期しなくちゃならないからねえ！ 怪我をした身で耐えられるようなヤワな折檻じゃないんだ。よーく、覚えておくんだね！」

そして曳地千江子はガハハと豪快に哄笑するのだった。

その笑いを、ゆみはかすかに耳にしていた。

けれどもそれ以上に今は自分の荒々しい呼吸音が聴こえている。道のないジャングルを進むのはそれほど大変だったのだ。剥き出しの二の腕や太腿に朝霧を含んだ小枝や葉、草の蔓がピチピチと当たってくる。大地にしっかりと根を張った低草木に脚を取られ、貌から地面に転がった。土だの蜘蛛の巣だのがロングヘアに絡みつく。脚の異様に長い吸血虫がふくらはぎの切傷にへばりついている。

千江子たちがすぐに追跡してこなかったわけがようやく理解できる。こんなところに準備もなく飛びこめばろくなことにならないのがわかっているのだ。それに絶海の孤島である。本当の意味の脱走などありえないのだから、慌てる必要もない。

ゆみにしても本気で逃げようと思っているわけではない。これは一種の予備行動なのだ。本格的な脱出計画を立てるための下調べである。島の地形や植性——食料になりそうなものがあるかなど——、それに追跡隊がどんな包囲網を布いてくるのか、窺うこともできよう。傾向がわかれば裏を搔く作戦だって可能である。

とにかくゆみは徹底的にレヂスタンスを行なう決心をしたのである。屈服などするものか。今の世の中にこんな理不尽が赦されるわけがないのだ。母親のことも中村先生のことにも気掛かりだし、あの権藤に一矢報いなければ気が収まらない。どんなにひどい目に遇わされても諦めだけはしまい、と、ゆみは土塗れになりながら決意したのだ。

それにしても何というジャングルなのだろう。頭上高く生い茂っているため空がほとんど見えない。つまり方角がまるでわからないのだ。取り合えず海岸線に出るには下っていく勾配を頼りに進めばいいと思っていたのだが、地面が複雑に凹凸を繰り返しているのも定かではない。棧橋からの道を昇ってきた時間と、ほぼ同じ時間は歩いているはずだから正確に海を目指していたならとっくに視界が開けてもいいはずなのに、波の音すら聴こえなかった。聴こえるのはザクザク腐葉土を踏みしめる音と、自分の荒い息、それに闖入者を威嚇する鳥たちの囀りだけだ。

ゆみは一際太い幹の樹の下で、しばらく休息をとった。海の方へは近づいていないようだったが、追っ手との距離はかなり開いているはずだ。

腰を下ろし、額の汗を拭く。身体中が汗でベトベトしている。白いソックスは元の色がわからないほど汚れていた。脚も腕も貌も同様だ。

(山に潜伏するゲリラの兵士みたいだわ)

ゆみはそう思いながら、黒髪を一つにまとめて後頭部で結びを作った。自慢のロングヘアもこんな時は邪魔なだけである。

(いったい彼らはどっちから来るのだろうか)

ソックスを脱ぎ捨てて素足にスニーカーを履きながらゆみは思う。積極的に捕まえる必要がないのなら、話は簡単だ。外部との接点だけを厳重に警戒していればいいのである。あの棧橋と、たぶん矯正院の建物の中にあるであろう、通信手段がある部屋。ここさえ押さえておけば安心である。島をグルリと取り囲む海岸線は自由への出口ではないのだから楽である。そこには獰猛な鮫と流れの早い潮が完璧な自然の有刺鉄線として立ちはだかっ
ていよう。万一、それを突破したとしても他の船に救いだされる可能性は無に等しい。この海に飛びこむとしたら、すべてに絶望し、自殺を決意した時だけだ。それはゆみにとってありえない選択なのだ。

しかし、何らかの理由で彼らが脱走者をすぐにでも捕

えなければならぬ事態が生じたとしたらどうだろう？
彼らは重要ポイントの警備を手薄にするリスクを犯しても山狩り部隊を編成し、搜索を開始するに違いない。そういう場合の定石は獲物を出来るだけ袋小路に追いこむような隊列を組むことだ。つまり獲物が逃げてほしくない方から、逃げてほしい方へ追っ手を差し向ける。だから獲物としては、ゆみとしてはその逆に逃走の進路を決定すればいい。隊列の穴を見つけられるかどうか、その一点に勝負がかかる。彼らの背後に抜け出せば可能性は開けてくる。

（いずれにせよ武器が必要ね。それに水と食料……）

ゆみは薄暗い辺りを見回した。石斧くらいなら何とかなりそうではあるが、威嚇用としてはちょっと弱い。飛び道具が欲しいところである。それより食料の方が難問であろう。果実は高い樹の上にあって、とるのに骨が折れ、逃亡者向きではない。歩くのさえ困難なジャングルの中で小動物を捕えるなど不可能に近い。やはり短期決戦に持ちこむしかあるまい。それにはどう彼らを慌てさせるか、どう本気にさせるか、それが思案のしどころである。

ゆみは立ち上がった。たしかに今、ゆみの逃げてきた方から怪しげな音が聴こえてきたのである。

それは金属的な音だった。バケツやドラム缶のような物を鉄棒で叩いている感じだ。それがかなりの数で広範

囲な横列をなしてじわじわと大きくなっている。

(来たわ——)

予想通りの展開だった。この音から遠ざかるように逃げれば罠にはまる。この音の中へ突っこめば唯一のチャンスが生まれる。しかし今は準備行動だ。彼らを警戒させるような戦略をとるのは得策ではない。今回は彼らの罠に進んではまり、勝ちどきを上げさせてやろう。好本ゆみはたいしたタマがないと心に隙が生じ、油断が生まれる。それは次回の伏線となるはずだ。

ゆみは徐々に近づいてくる音とは反対側へ歩きだした。

以前としてジャングルは開ける気配もない。とすると山の頂上へ向って追い立てられているのか。

突如、前方からもガンガンと音が聴こえてきた。これはかなり近い。数は疎らだが、隊列は扇形に包みこんでくる感じだ。とっさに、右へ行くか左へ行くか判断を迫られる。しかし躊躇する必要もなかった。左側からも音が聴こえてきたのだ。三方から追われれば道は一つである。そこに彼らにとって都合のいい場所が待ち受けているに違いない。ゆみは脚を取られながら右へ向う。

追っ手はさすがにジャングルでの行動に慣れているようだった。それに男の足である。確実に距離を狭めつつある。

ゆみが不思議だと思うのはどうしてこれほど自分の位

置があっさりと彼らに把握できたのかという点だ。これ以外に逃げ道はないと確信しているかのように、的確である。経験の為せるわざか、それとも何らかのセンサーがジャングルの各所に仕掛けられているのか、これはどうしても探り出さねばならない問題である。

虫の数がやたらと多くなってきた。湿気がひどい。ゆみの汗だらけの貌は上気している。辺りが急に明るくなったと思った瞬間、脚を踏み外した。

「あっ……」

身体が浮き上がり、次に腰をどこかに打ちつけた。とっさに近くの樹に絡みついている蔦に掴まって転落は免れた。そこは低い土手になっていたのだ。落ちたとしても大怪我の心配はなかったがパニックを起こしたかもしれない。下は小さな沼になっている。虫が増えた理由がこれだろう。たっぷり腐葉土を溶けこませたドス黒いヘドロ状の水面にメタンガスの気泡が浮いては弾けている。

ゆみは両脚を捻って土手の縁にかけ、なんとかよじ登った。

(これが奴らの罠ね)

さほど深いとは思えない沼だが、はまったらちょっとやそっとでは抜けられそうになかった。底無し沼、蟻地獄、そんな言葉が脳裏をよぎっていく。沼の向こう岸には同じようなジャングルが延々と続いているようだ。

これを迂回するには、すでに追っ手が迫りすぎている。缶を打つ音はもうかなりの大きさである。そして、それに紛れるようにはっきりと犬の鳴声が聴こえてきた。なるほどこれがすぐに追跡できたわけだ。ゆみの甘い体臭はこのジャングルでは突出して嗅ぎ分けやすいに違いない。

三方から迫ってる騒々しい気配にゆみは相手の手強さを痛感する。

(駄目、最初からこんな弱気はどうするのっ、好本ゆみ)

自分を叱咤しながらゆみはこれからどうしようかと思案する。

「おっ、ここに靴下が落ちてるぞっ」

男の野ぶとい声が背後でした。手柄を誇るような甘えた犬の鳴声。すぐそこだ。

仕方がない。ゆみは沼を渡る決心をした。

こんなもの、コケ脅しかもしれないし、いずれにせよ、どんなものかたしかめておいたほうがいい。

スニーカーを脱ぎ、タンクトップの中に押しこめる。乳ぶさの谷間をそれは汚した。さっきの蔦に掴まりながら降りていく。それにしてもクサイ臭いだ。ヌルツとした感触を足の裏に感じ、思わず二肢をくの字に引っこめる。生唾を飲みこみ、もう一度トライ。恐る恐る着地する。沼の底にすぐに触れたがあっという間に脚首まで埋

まった。必死に一步踏みだす。泥が煙のようにモクモクと沸きだした。体重をかけると脚はズブズブと沈んでいく。ふくらはぎまで沈んでしまった。膝に両手を添えて抜き出そうと踏張ると、反対の脚がはまっていく。なんとか沼の中央部まで進んだが、ことのほか水深があって、胸まで泥に浸かる。

とうとうここで身動きが取れなくなってしまった。ゆみの身体は微妙なバランスを保つのが精一杯だ。ちょっとでもそれを崩せば脚が底に又メリこんでいく。呼吸のたびに一センチずつ身体が沈んでいく。

やはりここは底無し沼なのだ。彼らはここへ脱走者を追いこむようにシフトを布いていたのである。跳ねた泥で汚れた美貌を歪め、ゆみは唇を噛んだ。臍の辺りまで泥が来ている。シャツがまくれ上がり、下腹が圧迫されている。

「あーら、お嬢さん、そんな所で泥遊びとはずいぶん余裕があるのね！」

笑い声がした。静かに振り返ると、土手の上に迷彩服に着替えた曳地千江子が仁王立ちしている。左右に犬の鎖を手にした男たちがニヤニヤ笑っている。さらに沼の周囲を取り囲むように迷彩服姿の男が姿を現した。二十人前後か。手に石油缶のような直方体の銀色の缶を持っている。それを棍棒で乱打していたのだ。

「口ほどにもないじゃないの、好本ゆみ。もうちょっ

と楽しませてくれると思ったのに。ここでジ・エンドとは歯応えがなさすぎるわ」

反発しようにも声を出しただけでまた沈んでいきそうだった。

「そこは『帰らずの沼』と言ってね。一種の底無し沼になってるの。はまりこんだら、自分の力ではどうにも出来ないのよ。いずれ貌まで沈んでそれっきり。私たちが追い掛けてきて、あんた、ラッキーよ」

乾いた笑い声が沸き上がる。

「さ、詫びを入れるのよ。入所早々、職員たちに世話を焼かせた詫びをね。そうすれば引きずりだしてあげるわ」

千江子は勝ち誇ったように金切り声を発した。

「誰が、あなたたちなんかにっ……あっ……」

思わず声を荒らげた反動でズブッと胸まで泥だ。あごが水面に触れて慌てて上を向く。「駄目よ。昂奮しちゃ。眼まで水にかぶったら、縄を投げても取れないでしょう。そうになったら終わりよ」

千江子の声をゆみはあっぷあっぷの状態で聴いている。この姿を見ながら彼女たちは喜んでいるのだと思うと、心底怒りがこみあげてくる。

「言いなさい、好本ゆみっ。『ご迷惑をおかけいたしました、悪うございました。今後このようなことはいたしません。心から反省し、矯正士の先生方のご指導に従

い、更正するよう日々精進したいと思います』とね。落ち着いて言えば、この程度なら鼻まで沈みこむくらいで済むと思うわ。そうしたら、すぐ縄を投げてあげる」

屈辱的な言葉など言うつもりはない。それにここですぐに屈服した態度を取れば、あまりにもあっさり兜を脱ぎすぎて、かえって怪しまれるに違いない。ここは思慮の足りない十代の跳ねっ返り娘を演じて、御しやすい、の印象を与えなければならないのだ。

「いやよ、絶対に！」ゆみは叫んだ。「あなたたちは鬼よっ。変態よ。こんなことをして何が面白いのっ。無実の私を、うっ、ゲボッ」

そこまで言った時、ゆみは泥水をしこたま飲みこんだ。みるみるうちに身体が下がっていき、頸を必死に伸ばしていなければ鼻が外に出なくなってしまった。

土手の上が騒つきだした。早くしないと、という声が囁かれる。

「まったく、なんて馬鹿なんだろうね。ロープをお投げ！」

千江子の命令と同時にゆみのすぐ近くにロープが落とされた。貌が沈みこむと同時にゆみはそれを手に取った。

数人の男たちの力がロープを手繰り寄せる。泥をぬったりとまみれさせた二本の腕に続き、貌が現れる。結んでいた髪がほどけ、頬に胸もとにこびりついている。つ

ぐんでいた唇を開けて、泥をペッペッと吐き出し、ズルズルと引かれていく。シャツもまくれあがり、アンダーバストまで覗けていた。もちろんその部分も泥がまぶされている。

「ホホホ、レディのマナーもエチケットも、欠けらもない野性児のお前には似合いのザマだわ！」

ようやく土手の所まで引きずられて来たゆみに嘲笑と淫らな視線が浴びせられる。泥レスリングが洋の東西を問わず根強い人気を保っている理由がわかろうというものだ。雪白の女体にチョコレート色の泥——未消化の嘔吐物のような半固体状のそれがベトベトにまとわりつき、えもいえぬ被虐美を醸し出している。うっすらと毛が生えている腋窩や胸の谷間が茶褐色化しているのを見ると、ゆみが美xxである分、ゾクゾクする冒瀆感を味わえるのだ。これが丸っこいあの尻の割れ目にも擦りこまれるように泥が染みこんでいるのかと思うと、沼を取り囲んだ男たちの多くは股間を熱くするのである。

ゆみは両腕を取られて岸に引きずりあげられた。荒い息に華奢な肩を喘がせ、突っ伏した。

「まあ、クサいわねえ。でもこれがこの娘の本当の臭いかもしれないわ。腐り切った根性の臭いよ」

ゆみの傍らにしゃがみこみ、千江子は直接触れるのも汚らわしいとでもいうように棍棒で彼女の肩をこじ開ける。

「うう……」

仰向けにされたゆみは、一瞬、憎悪に満ちた瞳で千江子を睨みつけたが、すぐに疲労に打ち拉がれるようにがっくりとあごを出して大の字に寝そべった。長い睫をゆっくりと閉じ、肉感的な唇を半開きにして、さあどうにでもしろと、捨て鉢な無防備でもって悪魔たちを見返している。

(いい度胸ね、まったく。調教しがいがあるわ)

千江子は眼を細めながら棍棒の先でゆみの頬を突き、さっと立ち上がった。

「それじゃ、脱走者好本ゆみを院まで連行するよ。そこでじっくり罰を与えてやる。こういう真似をしでかすと、どんな報いを受けるのか、来た早々、かえってこの金翔矯正院の方針を身体で知ることになって、お前にはいい勉強かもしれないわ！」

曳地千江子はそう言うと部下たちを促した。

ゆみは三四人がかりで強引に引っ立たされる。両腕を背中にねじ上げられて、ロープできつく拘束された。それだけではない。ロープの先に輪を作り、それを頭からくぐらされて頸にかけられた。締まるほどではないが、このまま家畜のように曳かれていく屈辱はゆみの胸を煮え繰り返させるに十分だ。

「鼻の穴を真っ黒にして、そんな貌で睨んでもちっとも恐かないよ」

千江子は嘲ら笑いながら棍棒を振ってゆみの尻を叩く。それを合図に頸縄がグイと曳かれ、煉獄への行進が始まった。

夜はとっくに明けていた。南国特有の派手な色彩が島に甦りつつあった。

島を海面に突きだした山と喩えるなら、金翔矯正院の建物はその八号目付近に位置していた。

三階建てのそれは町中にあってもおかしくないようなちょっとしたビルである。こんなものを本土から遥かに離れた小島の、しかもジャングルの山肌を切り開いて建設する資金力は並みの話ではなかったろう。

ビルの壁はジャングルに溶けこむように迷彩を施されている。上空から俯瞰してもこれでは発見できまい。一部の窓には鉄格子がはまっている。屋上には見張りなのか、一人の矯正士のユニホームを着た男が双眼鏡を構えていた。

道はうねるように建物の入り口に続いている。

「ここが――」

と、千江子がゆみの頭を小突きながら言った。

「お前の楽しい合宿所だよ。フフ、今日からここでみっちりその曲った根性を鍛え直してあげるからね」

ゆみは千江子のからかいをフンと無視し建物の窓に視線をやる。鉄格子のついていない、二階の窓のガラスの向うにこちらを伺っている貌がちらほら見えた。ゆみと

同じような年齢のxxたちだ。みんな同様にオカッパ頭をしていた。

千江子が気づいて見上げると、さっと姿を隠したようだった。

「まずその不潔な身体を消毒しないことにはね。風呂場へつれてお行き」

このビルには地下もあるのだ。風呂場は階段を下った突き当たりにあった。がらんとした浴室はかなりの広さはあるものの殺風景である。壁はコンクリートが剥き出しで、無機質な配管も天井に交差している。裸電球が薄ぼんやりした灯りをともしていた。

ゆみはようやく縄を外され、壁を背に立たされた。

「とっとと素っ裸になりな。愚図愚図している時間はないんだ」

「……」

脱げと言われても、浴室に入ってきたのは千江子だけではない。男性の矯正士たちもゾロゾロと着いてきているのだ。彼らの前でヌードになれというのか。

「馬鹿だねえ。院生と矯正士は一心同体なんだよ。言いかえてみりゃ、家族も同然なんだ。裸のつき合いが出来ないようじゃ早期の矯正だって不可能なの。心と心のふれあいつてのはすべてを曝け出しあわなければありえないものなのよ。さ、お脱ぎ！」

「拒否したら力づくでも脱がせるってわけ？」

高い鼻をなおさらツンとさせて、ゆみは軽蔑の眼差しで千江子以下を見回す。

「あーら、物分かりが早いじゃない。根っからの馬鹿でもないらしいわね。でも力づくは不穏当じゃない。命令不服従者を矯正するのよ。方法は色々とある」

「一応、屁理屈は用意されてるのか——」

ゆみは不敵にも口元に冷笑すら浮かべて言い放った。

ムツとして気色ばむ千江子を制するように、ゆみはいきなり両腕を交差させてタンクトップの裾を掴んだ。異様な緊張が浴室に張りつめる。

ゆみは何の逡巡もなく、泥が染みこみ、乾いてごわごわになっているシャツを脱ぎ捨てた。プルン。まさにプルンと双乳が曝け出されると、思わず男たちの間から声にならぬ感嘆が上がった。おそらく、これほど理想的な乳ぶさを一度だって見た記憶はないのだ。円錐の形といい量感といい、とてもティーンエイジャーのバストとは思えない。泥に汚れているせいか、妙な生々しささえ覚えてしまう。乳頭部がエビ茶色なのは泥を吸いこんだためだが、本来はたぶん餅のような肌に蕩けてしまいそうなピンク色をしているのだろう。乳暈も大きからず小さからず、そそる形をしていた。

タンクトップを脱ぎ捨てると、ゆみはすぐさま、ショートパンツ風のジーンズのベルトを緩め、ファスナーを一気に下ろした。薄いブルーのパンティの、ムンと盛り

上がる前面があらわとなる。このふてぶてしい十八歳の娘は、『こんなのはたいした問題じゃない』とでも言いたげに、度胸よくジーンズとパンティをいっしょくたに膝まで下ろしてしまった。腰を屈めながらくるぶしからそれを抜き取ろうとする姿は、呆気にとられるほど羞恥心が感じられない。もちろん肉体は下半身も抜群だった。贅肉が一グラムだってついていない下腹、生意気にもキュッとくびれたウエスト、そして成熟していないはずなのにムッチリと丸みを帯びた臀丘。ソフィ・マルソー並みに形の良いそれは挑発的に突き出されている。やや日焼けしている太腿は跳躍の選手のようにしなやかで遅く、反比例するように膝下からはほっそりとのびやかなのだ。

ゆみはジーンズとパンティを投げ捨てると、全裸の肢体を隠しもせず、まるで千江子たちの陰湿な苛めを嗤うように堂々と胸を張るのだ。挑戦的にあごを心持ち上げて冴えた表情で見返している。

どこもかしこも日本人離れし、二十代女性を凌ぐほどの彼女の身体だが、唯一、可憐なたたずまいを見せているのは、やはり陰部であった。下腹部から恥丘へとふくらみはじめるなだらかな肌に逆三角形型の陰毛が綺麗に生えている。そこは今はもう毎日剃り上げられ生え揃う自然の摂理を赦されない母、早苗の在りし日の茂りっぷりとは違って、年相応の密度の濃さである。ムサ苦しい

ほどの濃さはなく、かといって精力の線の細さを連想させるほどの薄さでもない。

それに連なる女肉はなおさら可憐だ。ワカメ毛に飾られた二枚の陰唇は色素の沈着も女の臭いを香らせる肉の厚みもなかった。早苗のように爛れるどころか、肉交を知った熟れもないのだ。マンコだけは乙女の様相を呈している。ここは先天的遺伝的なものよりも、後天的な経験が発達に寄与するのだろう。

「フン、可愛げのない娘だよ。そっちがその気ならこっちも手加減はしないよ！」

男たちがポカンと口を開けて見惚れているのとは対照的に千江子のテンションは上がっている。醜女特有の若い美女に対するジェラシーが煮え繰り返っているのだろうか。

千江子はホースを持ってきて、水道の蛇口に取り付けた。

「こんな露出狂にはシャワーなんて品のいいものを使う必要なんかないんだ。たっぷり味わうといい」

ホースの口を捻り、放水を開始する。

「あっ——」

水は激しい勢いでゆみを打った。白い飛沫が上がると同時にゆみの身体が壁にドスンと張りつけられる。乳ぶさが乱れ踊っている。黒髪が鮮やかな黒さを取り戻して跳ね上がった。泥が飛び、煤けていた裸体に本来の陶器

のような滑らかさと白さが復活する。

「ほらほら、穴の奥まで洗っておかないと、ブヨの卵でも宿したら大変だよっ」

千江子は残忍な表情になって、水の狙いを股間に集中する。

「いや」

急所に攻撃を受けて、初めて悲鳴を上げたゆみは二つ折りになるようにその場に屈みこむ。それでも容赦しない千江子は蛇口を一杯に開けて水圧を最高にする。

「アアアー」

胸もとに放水を食らい、ゆみの身体が一回転した。頭を下に、両肢をVの字に広げ海老固めの格好で肩へ膝がつく。水を浴びて剥き玉子の如くツルンとテカった臀部が天井を向いた。そのままさらに半回転して俯せに突っ伏すのだ。白い背中の中形良く浮き出た肩甲骨に黒髪が海藻のようにくねりながら貼りついている。

千江子はノシノシと近づいていき、後頭部を両手で抱えて耐えている女体へしばし放水を続ける。さらに革靴の先を横腹にこじ入れて仰向かせ、これでもかと容赦しない。悲鳴も出ないゆみだったが、しばらくは両腕をバタつかせて水の勢いを遮ろうとするも、すぐに息があがってしまい、抵抗もそれまで。壁に体重を預け、暴力的な洗浄に長々と打たれるままだ。

「どう、ぐうの音も出ないでしょう。ここでは生意気

は通用しないんだ。よく覚えておくのね」

ようやく癩癩が収まったのか、曳地千江子は水を止めるように指示する。

高温多湿のジャングルをさまよい、毛穴まで搔いた汗とヘドロ状の泥にまみれていた身体は一気に清められ、雫を滴らせている。睫の先から、鼻の頭から、あごの先から、そしてやはりほんのりと可憐なピンク色していた乳頭部からもポタポタと落ちている。目に染みる黒さを取り戻した陰毛は逆立ち、水滴を朝露のように含んでいる。

千江子が何やら合図をすると、一人の矯正士が歩み寄ってきた。男の手には細い注射器が握られていた。

「——！」

ゆみの表情が強ばる。

「心配はないんだよ。この島には熱帯特有の風土病があるんだ。その予防注射さ」

「う、嘘っ」

彼女たちのことだ。それにかこつけてよからぬ薬が入っていないとも限らない。ふと中村久美子先生の狂態がフラッシュバックする。彼女の肌についていた注射の痕がまだ脳裏に焼きついている。しかし、ゆみは今の放水でぐったりと疲れ切ってしまい、逃げる気力も起こらない。

男はニヤニヤ笑いながら胸や股間にたっぷりと視線を

這わせ、そしてやおらゆみの肩を押すと身体を横へ倒した。

「……やめてよ……どうする気……」

エタノールを湿した脱脂綿で太腿を擦られた。背筋がフツと竦み上がる。長い針が青い静脈に差しこまれた。

「今度は濡れた身体を乾かさなきゃならないわね。入所早々風邪でもひかれちゃご父兄の方に申し訳がない。さあ、有望新人のお嬢さんを屋上にお連れしてっ。今日も陽なたぼっこにはもってこいの天気の違いないわ！」

ゆみは二人の矯正士に両腕を抱えられて立ち上がらされる。歩くというより、ズルズルと引きずられて階段を昇っていった。

(熱いわ……身体が、熱い……)

なぜか身体がカッカと燃え盛っている。あの注射のせいなのだ。身体全体が熱病にでもかかったように火照って、喉がカラカラに乾いていた。ゆみはしきりに赫い舌を出して唇を舐め回した。

「フフ、ひどい汗。喉が渴くでしょう。人間、餓えと喉の渴きには耐えられないものよ。どんなに鼻っ柱の強いお前でも強情は張れないわ。すぐに泣き叫んで服従を誓うようになるのよ。その時の貌が楽しみだわ」

「ひどいわ。どこまで卑劣なの。こんなことまでして絶対に訴えてやるから」

「意気がってられるのも今のうちだけ。訴える気が

起こらなくなるようにするのが私たち矯正士の役目なのよ。時間はたっぷりあるから、身体も心もすっかり改造してやるわ」

「誰が……誰が……」

そう毒突きながらもゆみは額に脂汗を滲ませ、身体の火照りと闘っている。

屋上は下から見た時の印象より、かなりの面積を持っていた。その三分の二のスペースを占有しているのがソーラーパネルだ。この島の電力はほとんどこれに依存している。パネルはその表面を雲一つない東の空に上がった太陽へ向けて陽光を反射している。

ギラつく太陽——本土のそれより遥かに赫く、歪んで見える。狂暴な熱を茫々と発散して地表を焦がすかのようだ。

ゆみはその炎天下に連れ出されたのだ。

素足に屋上のコンクリートの床は熱い鉄板のように感じられる。

「ここで少し虫干ししてあげる。太陽をみながら反省しなさい。頭を冷やせてわけにはいかないけどねえ」

千江子が指図するまでもなく、男たちは床に薄いタオルケットを敷いてゆみを寝かせる。そこには四本の杭がちょうど長方形の角々に当たる位置に打たれている。彼女はその長方形の中央に横たわっているわけだ。数人がかりで四肢を掴み、ピンク色に上気しているゆみの身体

を、一二の三でX字型に開いた。

「——っ」

陵辱行為を拒む体力をあの注射が奪っている。じっとりと汗ばんだ裸体が惜し気もなく開かされ、両手首両脚首にそれぞれ縄が食いこみ、杭に結びつけられる。

「うっ、うう……」

腋窩が抉れるほど、腕が引っ張られた。下肢も無残に割り裂かれ、内腿の筋肉が痛々しく浮き出ている。磔の苦痛もさることながら直射する日光の強さは眼も眩むようだ。さらにコンクリートの照り返しで表面の温度はいっそう募っている。タオルケット一枚を通してヒリヒリと背中を焙られる感じだ。

苦悶する彼女を取り囲んで悪魔たちが見下ろしている。逆光なので黒いシルエットにしか見えない。口惜しさに紛れて、何か悪態を吐いてやりたかったが、口の中が乾き切っていて声にならなかった。唾も沸いてこない。

「お前は本当に露出狂だね。これだけされても羞恥心ってものが欠けらもないじゃないか。オマンコもお尻の穴もみんな剥き出しているのにさ」

千江子は腋の下を靴で突きながらケラケラと嗤った。

「それじゃ、私たちは行くけどね。お前には専任の矯正士を二人、つけることにしたからね。紹介しておくよ」

あごをしゃくると、二人の男が前に出てきた。一人はかなり若い。ゆみと同年代に見える。もう一人は逆に年配だ。五分刈りの頭が白髪混じりのゴマ塩だった。

「四郎とマサヤんよ」

指差した順番からして若いのが四郎、年配がマサヤンであろう。

「この二人はここに残すから、じっくり院生の心得を教わりなさいな」

千江子はそう言うと改めて空を見上げ、今年一番の暑さになりそうね、と一人ごちして踵を返した。それに従うように他の矯正士たちも続いていく。中には名残惜し気にゆみの股間を露骨に覗いていく不届き者もいたが、屋上はすぐに三人だけとなった。

四郎とマサヤンは折り畳み式の椅子を持ってきて、ゆみの横へ挟むように坐った。影がゆみの身体にかからないように気をつける陰険さである。マサヤンは涼しげな麦藁帽、四郎はジャイアンツの野球帽をかぶり、手にはうちわと扇子という用意の良さである。

「まったく、こいつのおかげでつまらない仕事の一つ増えたってわけだ」

四郎が忌ま忌ましそうに口にしたが、表情は万更でもない様子。視線は豊満なゆみの胸乳と下腹部を行ったり来たりしている。マサヤンはそれに答えず、じっとゆみの貌を凝視している。

ゆみは冷静に自分専任と紹介されたこの二人の男を観察した。隙を突くチャンスがあるとした、狙いは四郎の方だろう。若いし、頭も悪そうだし、口も軽そうだし、この男なら騙せそうだ。マサやんは薄気味が悪い。こちらを見る目つきは人間を見ているようなそれではない。肉職人が調理の前の肉塊に対してしているようだ。彼と四郎とでは、そう、プロとアマほどの相違があるといってもいい。

「なんだい、どうしてジロジロと俺の顔を見るんだ？」

四郎は怪訝な表情をして言うのである。

ゆみはそれに答えず、無言である。四郎から視線を外し、空を見上げ、そしてゆっくりと目を閉じる。かすかに口元に笑みを浮かべている。

それが自分を小馬鹿にした嗤いと取った四郎は憮然とした表情になる。

「いけすかない女だな。まったく。あのキャシーだって、天日干しにされた時はビービー泣いて大騒ぎだったのによ」

ゆみの眦がピクッと動いた。

「キャシー？ キャシーって誰よ？ 外人？ その娘も院生なの？」

「お前とおんなじで、連れてこられた時から反抗ばかりしている合いの子だ。今日も独房で……」

「四郎——」

マサヤんが初めて口を開いた。

「余計なことを言う必要はねえ。この女、お前を挑発して情報を探り出そうって腹だ。気をつけな」

「わ、わかってるよ。マサヤん。誰がこんな小娘なんか」

四郎は狼狽して顔面を紅潮させ、足に突っ掛けていたサンダルを手に取ると、いきなり、ゆみの頭を殴打した。

「——」

ゆみは貌もしかめず悲鳴も上げず、再び瞑黙する。うっすらと笑みを浮かべることも忘れない。

「糞、こいつ！」

四郎はもう一度、殴りつける。

「俺を甘く見るとこういう目にあうんだ。よく覚えておけ！」

ゆみのふてぶてしい態度が相当気に障ったらしく、四郎はまたサンダルを振り上げた。「やめろ、四郎。言った矢先に挑発されやがって。そんなことだから、俺がつき添ってなきやいけないんだろうが。こういう頭のいい女には熱くならず弱点を掴んでからじっくり責め落とすのがコツなんだぜ」

マサヤんにたしなめられ、四郎は怒りのやり場に窮して、しばし突っ立ったままだったが、やがて無言のまま

椅子に坐り直した。

「それにしてもいい身体してるな。ゆみ」

マサやんはバタつかせていた扇子を閉じて、その柄で乳ぶさを突いた。

ゆみはしかしまったく同ずる風もなく、目を瞑ったまま無視し続けるのだった。

処女のくせに乳ぶさを弄ばれても、薄ら笑いさえ浮かべているゆみの度胸にマサやんは苦笑する。こんな程度で歯を剥き、大声でも上げては体力の消耗が著しく、結局、屈服の時も早まるのだ。挑発にのらず、石になってやり過ぎ、カルシウム注射による体内からの侵蝕と汗を蒸発させ肌をチリチリと焦がしていく天日干しの責め苦——これと少しでも長く闘おうというのだ。臨機に应变し最善のレジスタンスで、一歩だって怯む様子を見せない。

マサやんは乳ぶさを捏ね回しながら久々の上玉に内心ほくそ笑む。たしかにキャシー、田中キャサリンもしぶといが、精神力よりも毛唐の血が混じった体力で抵抗しているといった感じで、マサやんの好みではない。ゆみのようにきめの細かさを感じさせるキリリとした芯の強い娘が好きなのだ。

好きなればこそ、どんなことをしてでも鼻をあかしてやりたくなってくる。サヂィストの因果である。

「ほんとにいいオッパイだ。誉めてやるぞ。お前のマ

「ママもこんなに巨きなオッパイをしているのか、え？」

思いもかけず母親を持ち出されてゆみは瞳を開き、マサやんを睨みつける。口を真一文字に結び、言葉こそ発しないが表情は険しい。身体はすでに灼けはじめていた。腕や太腿といった露出している部分以外の肌も確実に赫くなりだしているのだ。

「オッパイのサイズってやつは遺伝するものだからな。きっとママもデカパイなんだろう」

「つまらないこと、言わないでっ」

我慢仕切れなくなったようにゆみは口を開いた。

「母を侮辱すると赦さないわよ！」

マサやんは目を細める。

（こいつの弱点はこれだな）

この娘にとって母親は尊敬すべき理想像なのだ。神聖にして侵すべからざる存在なのだ。それを冒瀆されれば理性が途切れて頭に血が昇るのに違いなかった。

侮辱じゃねえ、誉めてるんだ、とマサやんはゆみの剣幕をすかすようにニタつき、四郎にゆみの身上書を取ってこいと命じた。まだ不貞腐れている四郎だがどこからか厚いファイルを手にしてきた。

それをパラパラとめくっていたマサやんの指がピタッと止まる。

「好本早苗、四十歳。ほう、すげえ別嬪じゃねえか」

「……」

「バスト93、ヒップ95。なんだこりゃ、とんだ白豚だぜ」

マサやんは赤い歯茎を剥き出しにして大笑いした。ゆみはこめかみに青筋を立てて憤懣やる方ないといった形相である。どこからそんな数字を知りえたのか、しかし、ゆみの知っているかぎり、そのサイズは当たっているのだ。

「ゆみは白豚から生まれたってわけだ。じゃあ、オッパイがボインなのも無理はないな」

「も、もう赦さない！」

ゆみは拘束されている四肢に精一杯、力を入れて縄を振りほどこうと藻掻くが、二の腕や大腿部の筋肉がむなしくよじれるばかりである。

「怒るな。お前が赤ん坊の頃、チューチュー吸ったオッパイを誉めてやってるんじゃないか。もちろん、それだけでこんなに巨きくなったわけじゃないぞ。たくさんの男に吸われ、揉まれ、シゴかれしたからデカくなったんだ。どれ、早苗は何歳の時に結婚したんだ——」

老獪なマサやんの手管を、ようやく落ち着きを取り戻してきた四郎は感心しながら見守っている。サンダルでひっぱたいでも動揺一つみせなかったゆみがあっさり自分を見失いつつあるのだからさすがというほかない。マサやんはゆみが母親のことを言われるとムキになるのをどうやって感づいたのか。筋金入りの嗅覚だ。今の四郎

には到底真似の及ばぬ芸当である。

「ほう、二十一歳の時に学生結婚。翌年、お前を出産したわけだ。なるほど若くからパパに揉み続けられていたら、Dカップにもなるうってまんだぜ。もちろん、パパさんだけじゃなくて、他の男にもモミモミされていたんだらうがな」

「母はそんなふしだらな女じゃないわ！」

「お前みたいな貴娘にはわからんだらうが、女って動物は、若いうちから亭主をもって、おまけに乳飲み子を抱えるなんてことになりゃ、欲求不満がたまって不倫願望に囚われるもんなんだ。早苗も当然……」

「やめて！ あなたみたいな変態に母を呼び捨てにさせてはおかないわよ！」

「ごたいそうに、早苗は市会議員の先生ときている。ま、政治家のヒヒ爺いどもは、あっちのほうの精力も旺盛らしいから、早苗も不自由しなかつたらうぜ」

ゆみは頸を揺さ振り、唾でも吐きかねない様子だ。それでも熱帯の日差しは確実にゆみの体内から水分を奪っていく。カラカラの喉は渇きに対する餓えを否がおうにもゆみに自覚させた。加えて、マサやんの母への侮辱がゆみのアドレナリンを分泌させ、発汗作用を促している。

「きっと大年増のオッパイに……」

と、四郎も要領を得たように嘲りに参加してくる。

「爺いのチンポ挟んでパイズリなんかしてやってんじやねえのか」

マサヤンも大げさに頷いた。

「そーよ。93センチもありゃ、ばっちり挟めるだろ」

「どんなデカ魔羅でも腋の下の肉まで掻き集めりゃ、包みこめる」

口々に下劣な猥語を言い合って、二人は腹を抱えて笑い転げた。

「狂ってるわ……ハアーツ……」

思わずゆみの口から辛そうな吐息が漏れた。

暑いっ……。

お水をガブガブ思いっ切り飲みたい……。

理性は拒否していても身体は彼らの持っているうちわや扇子で扇いでもらいたいと欲している。屋上なのにまったく風がなかった。頭がボオーツとしてきた。

男たちはまだ盛んに母を侮辱していた。

「ゆみの毛の生え具合から察するに、熟女早苗も濃くはなさそうだな」

「どうだかな。男の精を吸えば吸うほど、女ってのは毛深くなるもんだ。四十女の早苗が疎林はねえだろ。きっとケツの穴のまわりまでみっちり茂ってるだろうよ」

「どうだい、ゆみ。娘ならママのマン毛の様子、知ら

ないはずはないだろ。教えてみい。濃いのか薄いのか、どっちだ？」

「馬鹿！ 変態！ チンピラ！」

「おうおう、猿みたいに真っ赤な貌して恐れ恐れ」

もうさっきのように直情することもなく、ゆみの悪罵を余裕を持って笑い飛ばす四郎である。

「お、そろそろ時間だ。裏に引っ繰り返すぞ」

懐中時計を取り出して、時刻に目を落としたマサやんが言った。

二人は立ち上がってゆみの四肢を繋ぎとめている縄をほどきはじめる。

「うう……」

一瞬の解放だが関節は痺れて感覚を失って、身体を縮めもできなかった。ゆみは軽々と俯せに転がされ、改めて手脚に呪縛を受けた。

三十分ごとに交互に灼くのだという。身体全体を火ぶくれにするつもりなのだ。しだいに皮膚呼吸ができなくなり、大変な苦しみを味わうはめになる。大抵の場合、それまでに屈服して赦しを乞う結末になっている。

「今までの最高はキャシーの三時間二十一分だがな。あの娘、つまらない強情を張るものだから、おかげで今だにシミになって残っているぜ。せっかくの白人みたいな真っ白な肌だったのによ」

四郎は俯せにX字型になったゆみの裸体に視線を這わ

せながら言うのである。ハーフのキャシーほどではないにしる、ゆみの肌も負けずに雪白なのだ。赫く火照った前半分と同じように、まだ白さの残る背や臀部や太腿を焙るのは勿体ない気がする。とくに、美しく背筋を窪ませた背中から腰にかけての曲線美は乳白色だからこそ色香が漂うものだろう。

その背や肩にバサバサになって乱れかかっている黒髪をあやしなから、四郎が言った。

「汗に泥に、おまけにホースの水じゃ自慢のロングヘアも滅茶滅茶だなあ、ゆみ」

そして指を肩甲骨から背筋につーっと這わせ、

「この餅肌、ローションも塗らずに直射日光を浴び続ければどうなるか、わかるだろう。シミやそばかすになって残るぞ、絶対。紫外線、本土の倍は強いからな」

「そうそう——」

と、マサヤンも相づちを打つ。彼の手は臀部の肉をモミモミしている。

「肌の白さは七難隠すというだろうが。お前みたいに心が欠点だらけの女はせめて身体だけでも磨かにか、女としての存在価値がなくなる。そうはなりたくねえだろ？ 今からでも遅くねえから、素直に詫びてみな。すぐに縄を解いて薬、塗ってやるぜ」

ゆみはおぞましい二人の淫撫に鳥肌を立てながら、貌を上げて振り返り、叫ぶのである。

「汚らわしい手で触らないで！ 詫びることなんか一つもないわっ。変態の悪党から逃げようとしただけじゃない。普通の町にいられなくて、こんなところに逃げこんで、子供相手にいばるしか能のない人間失格者のあなたたちからよ！ あッ——」

マサヤんが頭髪を乱暴にわし掴んだのだ。ギリギリと引き絞り、ゆみは喉を曝して仰けぞらされる。白い歯を剥き出し、激痛を食い縛る。

「いいか、ゆみ。この島で俺たちに逆らってばかりいると、ますますブスになっていくんだぞ、と親切に教えてやっているんだ。わかるな。今のような生意気な口をきけばきくほど、食い物だって粗末になる。睡眠時間は切り詰められる。おまけに重労働とくりゃ、お肌に悪いだろ、な？ 素直になれ、素直に。フッフ、唇がカサカサじゃねえか」

マサヤんは笑いながら、瑞々しさがなくなり色を失っているゆみの美唇を小指でなぞる。眉間に皺を寄せ、眦を吊り上げて恥辱と苦痛に耐えるゆみの表情は凄惨な美しさがあった。一瞬、それに見惚れて珍しく我を忘れたマサヤんの顔に、ゆみはいきなりぺっと唾を吐きかけた。貴重な、ほんの僅かな量の唾液……。

「ケッ、強情な娘だっ」

持ち上げていた貌を叩きつけるように離し、マサヤんは不機嫌な表情で尻たぶを抓りあげる。

ゆみの身体がピクンとしながたが、だが悲鳴の代わり
にクスクスと笑い声をあげる不敵さ。

「チンピラに説教してたわりに、中年もカッとくるよ
うね。結局、同じ穴のむじななんだわ。あなたたち。い
い勝負よ」

「こいつ！ なんてことを！」

四郎が立ち上がってゆみの脇腹を蹴り上げようとする
のをマサヤんが制した。

「よせ。それより、あれを持ってきな。俺たちは少し
休憩しようじゃねえか」

マサヤんは椅子に座り直し、ポケットから煙草を取り
出した。マサヤんのめくばせに四郎は合点し、嘲ら笑い
ながら立ち去った。

煙をゆっくりと吐き出しながら、マサヤんは改めてゆ
みの裸体を見回す。荒い呼吸に脇腹がせわしなく上下し
ている。ゆみくらの豊満な乳ぶさの持ち主を、これだ
けぴったり俯せに礫ると、プクッと腋から横にはみ出し
てくる。何とも淫猥な眺めだ。その肉も赫く灼けてい
る。背中もうっすら焦げはじめた。限界が近づいてい
る。

四郎が戻ってきた。手にクーラーボックスを抱えてい
た。中から壘の触れ合う音が涼しげに響いてくる。

それをわざわざゆみの頭の前にどっかりと置くのだ。
どうしたって、視線が釘づけになってしまう。身体欲

求がそうさせる。卑劣な彼らの企みを感じているが、ゆみの瞳は餓えに満ちていた。

「お前はこの暑さ、耐えられるんだろうが、俺たちは全然駄目だ。だからちょっと喉を潤させてもらおうからよ」

四郎がクーラーボックスの蓋を開けると、白い水蒸気がさっと立ち昇った。

「……」

ザクザクと氷を掻き回す音に、ゆみは思わず唇を舐め回す。

中から取り出されたのはコーラであった。独特の流線型のフォルムの壺が水滴を一杯にしたたらせている。濃褐色の液体にゆみの喉が鳴った。

栓抜きが捻られ、シュッと空気の抜ける音とともに炭酸の白い泡が狭い口から溢れだした。四郎はそれをマサヤんに手渡した。移動するコーラの壺を追って、ゆみの充血した瞳が食い入っている。

「欲しいのか、ゆみ？ 一言、済まなかった、反省します、と詫びりゃ何本でも飲ませてやるぜ」

「い、いらないわよ。犯罪者に詫びる気なんてこれっぽっちもないわ」

肉体の渴きを打ち払うように、ゆみはヒステリックに叫んだ。先程までの冷静さを欠いているところから見ると、相当切羽つまっているのだろう。

四郎も栓を抜いた。泡が壘の表面を伝わり落ちていく。

「じゃ、勝手にやらせてもらうぜ」
二人はぐっと壘を傾けていく。

「……」

喉がゴクゴクと波打っている。男たちの飲みっぷりを見ていると、頭の中が真っ白になってしまった。口を半開きにし見る見るうちに少なくなっていくコーラを呆然と凝視している。彼らが一滴残らず飲み干すと、ゆみもがっくりと貌を伏せた。喉のザラつくような渴きがいっそう募ってきた。

四郎はゲップをしながら、もう一本、コーラを開ける。それもグビグビと一気だ。さすがにマサやんはそうはいかず、ちょっと口を湿しただけで煙草に切り替えた。

「フフ、炭酸は若いもんにはかなわねえな。こんなに余っちゃった」

わざとらしくいいながら、マサやんはゆみの傍らに腰を屈め、突っ伏している彼女のうなじに壘の腹を押しつけた。

「うっ——」

鋭利な刃物を当てられたようにゆみの貌が跳ね上がる。

冷たい——！

火照り切った身体にその部分だけ感覚が戻ってきたような錯覚に陥る。思わず、陶然として頬を摺り寄せてしまう。

意地悪く壘を皮膚から離し、彼女の鼻先にぶら下げるマサヤン。

「お願いっ、少しでいいから飲ませてよ……」

耐え切れなくなったようにゆみは言った。マサヤンに向ってではあるが、その視線は壘の中の黒い液体に釘づけである。マサヤンがゆっくりとそれを左右に振ると、つぶらなゆみの瞳も追い掛けるようについてくる。陰湿極まるからかいに滑稽なくらいに反応をみせるゆみは、眼をぎゅっと瞑ってがぶりを振った。自分を取り戻そうとしているのだ。

「言ってるだろう。詫びるんなら飲ませてやるって」
ゆみはいやいやと黒髪を踊らせて拒否する。

「じゃあ、これはここに捨てちまおう」

マサヤンは壘を傾け、ゆみの眼前一メートルのところにボタボタとこぼしはじめた。熱せられたコンクリートにジュッと弾け、あっという間に蒸発していくコーラ。ゆみは反射的に身を乗り出して赫い舌を伸ばした。もちろん、厳しく拘束されている身では一センチ動いたかどうか……。無情にも彼女の舌には飛沫のひと雫だって届かないのだ。

「しかし、ゆみもだいぶ角が取れてきたようだな。つ

まらん反発心より、浅ましい本能が表に出てくるようになってきた。それに免じて少しだけお湿りをくれてやろう」

「ほ、ほんと——」

最後までこぼし切らなかった壘をかざしてニタつくマサヤんを、ゆみは見上げる。

「ああ、ほんとさ。気持ちいいぜ。コーラのシャワーは」

コーラはゆみの口を湿らせるのではなかった。マサヤんはゆみの背中に向けて、一滴二滴、こぼしたのだ。

「ヒューッ！」

つんざく悲鳴とともに、ゆみは身体をエビぞらせた。ヒリヒリ灼けた肌に炭酸がシミこんだのだからたまらない。ピンク色になった背をコーラがつーっと流れ落ち、脇腹の方へ消えていく。

「いい声上げて。それほどいい気持ちなのか」

「そりゃそうですよ。乾き切った身体ですからね」

四郎も彼女の背後へ廻り、そのこんもりとした双臀に泡を垂らした。

「っ……」

泡は臀丘のカーブにそって流れ下る。あるものは腰のくびれへ、あるものは腰骨へ、そしてあるものは割れ目に添い、敏感な括約筋へとシミこんでいくのだ。はしたないと知りつつ、尻を振り、肛門を引き締めた。

「上の口からは飲めなくとも下の口から飲めたんだから、おんの字ってもんだな。なあ、ゆみ」

苦悶する鉄火娘の表情を楽しみながら四郎は溜飲を下げて大笑いする。

「卑怯者……卑怯者……」

ゆみはうなされるように口走った。

マサやんはクーラーボックスからかき氷のかけらを一粒、摘みあげた。透き通った、角砂糖のような立方体である。そして再び、ゆみの頭部に屈みこみ、それを彼女の鼻先へ突き出すのだ。ゆみの罵りの言葉がピタッと止まった。

「しゃぶりてえか、ゆみ？」

ゆみはガクガク頷く。

「口をアーンと開けな」

本当にくれるのか？ ゆみの表情が疑心暗鬼に強ばる。氷とマサやんの顔を交互に見やった。マサやんとしてもこの程度は致し方ないと踏んだのだ。当分、この娘の精神力は崩れそうにない。しかし肉体的にはもう限界だ。このまま放っておけばあと十分ももたずに失神して医務室に運びこむことになるだろう。そうなれば自分たちの矯正士としての面目も失ってしまう。ここで少し水分を与えて、肉体的に長持ちさせたほうが精神的な屈服を得る確率は増してくる。どうせかき氷一粒では、肉体全体の渴きを癒すには至らない。一瞬の充足感の後、前

に勝る渴きが襲ってくる。水の冷たさが喉にシミこんで、ますます火照りを意識せざるをえないのである。マサやんの豊富な経験がそう教えている。

それにゆみの苦しみが長続きすればサディストとしての楽しみも継続するわけだ。かき氷にしゃぶりつくゆみの貌はきっとこたれられない被虐美に溢れていることだろう。見逃す手はない。ようするにマサやんはゆみが気に入ったのである。

人差し指と親指で摘んだ氷の立方体をマサやんはゆみの眉間に押し当てた。

「アアアーツ……」

眼と口を半開きにして感極まった声を上げるゆみ。吊り上がっていた瞼が下がり、恍惚としている。脳の芯まで冷たさがシミ渡っているのだ。

氷が、体温に僅かに融け、二本の筋となって鼻の脇を岐れ流れた。汗が渴き、埃を貼りつかせている粉っぽいゆみのその部分が、素肌の色を取り戻した。水が唇まで流れてくると、ゆみは餌にありついた犬のような貪欲さで、赫い舌を長々と伸ばして舐め取っていくのだった。ベロベロと鼻の下を舐め回す貌は精液を浴びたニンフオマニアの如く淫らに見える。

「は、早く、ちょうだいっ」

せつつくゆみを見無視し、しばしその貌を拝んでからマサやんは眉間に当てた氷をゆっくりと頬に滑らせる。

「こめかみの辺りがキンキンするんじゃないか、ゆみ」

「焦らさないで——」

反発する声も鼻にかかっている。これが十八歳の娘かと思うほどセクシーだ。いつのまにか四郎もマサやんの傍らでウンコ座りスタイルになっていて、ゆみのザマに見惚れていた。

「さ、口をアーンと開けるんだ」

マサやんの命令にゆみはもう逡巡もなく美唇を開けていく。綺麗な山形をつくった上唇とむっちり肉感的な下唇が、象牙の駒のような歯並びを覗かせながらパツクリと上下に離れていった。

「もっと大きくだ」

桃色の口腔を覗きこみながらマサやんは叱りつける。

「もっと、大きく！」

「あーんぐっ……」

眉間に悩ましい縦皺をつくり、小鼻をヒクつかせ、あごも外れよとばかり大口を開いたゆみの貌は、なんだか魚眼レンズを通したようになっている。ねだるように舌をベロベロ伸ばしているその蠢きの合間に、かいま見える緋色の喉ちんこがまたいやらしい。

マサやんは融けて角が丸くなってきている氷を尖った舌尖につけてやった。思わず鼻を鳴らし、恥も外聞もなくしゃぶりまわすゆみだ。マサやんの塩っ辛い指も舐め

ざるをえないが気にする余裕はない。

「おッ、おッ、おうッ」

海獣のような声を発し、舌で巻き取ろうとする。

マサさんはニタつきながら指を進めていった。鼻の下をヌッと伸ばして二本の指ごとしゃぶりついた。十八歳の処女の口腔の感触はあくまで柔らかく蕩けそうだ。舌の使い方は参考にならないとしても、長さはたっぷりあるし、腰も強そうである。これで海綿体を舐められたら暴発を自制するのに一苦労するだろう。

舌が上下左右に激しく動く。その摩擦と体温で氷の粒はあっという間に小さくなる。

「はーん——」

物足りなさに鼻の奥で泣き、水に濡れているマサさんの指までしゃぶっている。

(これがこの娘のフェラチオ貌ってわけだ)

ジャジャ馬の女王のような好本ゆみが男の股間に跪き、本物の一物を口一杯に頬ばってこんな表情で奉仕する時を思うとさすがのマサさんも勃起しそうになる。

(その時はこんな細いものじゃねえぞ、ゆみ。あごが外れるほどのデカ魔羅、啞えさせてやるぜ。歯も立たないような硬いチンチンをな)

淫らな妄想に耽りながら、しだいにマサさんは己れの指をゆみの口の中で抜き差ししているのだった。

太くて短く、醜いタコやマメの出来ているマサさんの

指を根元まで含みこみ、モゴモゴと頬をふくらませて吸うゆみ。引きだされたそれにはゆみの唾液がたっぷりとならついている。

喉の渴きを癒すひと雫の水分も吸い取れなくなるまで、ゆみは浅ましい行為に没頭していたが、やがて自分が下劣な悪党の指にしゃぶりついている現実にハッと気がついたようだ。赫く灼けた貌を今度はしっかりと羞恥に紅潮させて、ゆみは啜っていたものを吐き出した。

「鬼ッ——」

どうしようもない肉体の欲求とはいえそんなことまでしてしまった自己嫌悪に動揺し、それからそう仕向けた彼らの残虐性に憤怒してなじるのだ。

「絶対、赦さないわ。必ず復讐するわよ」

わずかな水分の補給でこれまで気力を回復したのは、やはり若さの表れか。マサやんは呆れるより感心して四郎の肩を叩いた。

「さて、そろそろお姫様の表を灼く時間だ」

四郎のズボンの股間は隠しようもないほどふくらんでいる。ゆみに惚れたのはマサやんだけではないらしい。

触るな、変態、畜生、あっちへいけ——

元気を取り戻したゆみの悪口雑言を柳に風と受け流し、二人は再び、女体を仰向けに括りつけた。

——それから何時間が過ぎただろう。日差しは衰えずガンガンと照り続けている。その下でゆみは裏にされ表

にされ、全身を灼き尽くされていた。皮膚はくまなく赫く火照っている。乳ぶさも腋の下も内腿もラピアもだ。途中補給した水分の効果もとっくに消え、意識も朦朧としてドクターストップ寸前といったところ。

しかし、ゆみはまだ屈服していなかった。

苦虫を噛みつぶして扇子をバタつかせるマサやんと、鼻毛を抜いている四郎の足元にはジュースだのコーラだのの壺や缶が散乱している。

すでにキャシーの最長記録を更新しているのだ。脅してもすかしてもゆみは首を縦に振らなかった。もうあの火のような反発こそ見せなかったが、男たちが貌を覗きこむと、まだ拒むように視線を反対側へそらす気力を残している。

「水……水……」

彼女が口にするのはこれだけだが、決して詫びを入れるような言葉はなかった。

「ちっ」

マサやんが時計を見ながら舌打ちする。そろそろいくらなんでも限界である。いや、ゆみの体重からすればすでに限界点は越えていた。今日入ったばかりの院生を再起不能にしてしまったのは責任問題だし、かといって詫びもさせられなかったとなれば物笑いの種。いずれにせよこの好本ゆみに煮え湯を飲まされた事実が残る。

マサやんがイライラしながらゆみの胸乳を突いている

と、四郎が間抜けな声を上げた。「ああ、あれ……」

四郎は南の空を指差している。

「きますよ。一降り——」

マサヤんが指差された方向を見やると、雲一つなかった快晴の空に入道雲が覆ってきているのだ。ぐんぐんと沸き起こってくる。

「くそ、もうそんな時間か」

ついゆみにかまけて忘れていた。ここではこの季節、熱帯地方特有のスコールが、毎日、決まった時間に訪れるのである。バケツを引っ繰り返したようなどしゃぶりが短時間、通っていくのだ。本土生活数十年のマサヤんはここでの季節感にまだ馴染めていないのだった。

「スコールがくりゃ、この天日干しもおしまいだぜ」

「ゆみの野郎の粘り勝ちというところか」

「馬鹿、感心してる場合じゃねえだろ。また曳地千江子女史に嫌味言われるんだ。ちっとは職業意識に目覚めねえか、四郎よ」

喋っている間にも雲は頭上に近づいてきて太陽を隠しはじめた。網膜がザラつくほどのまばゆい南国の景色が、灰色のフィルターをかけたように明度を落とした。気温が高かった分、ちょっとの下がりでも肌が敏感に感じとる。一陣の涼風が木々を揺らし、ゆみの女体を撫でていく。

「——」

ボウーッとした脳に精気が吹きこまれたように、ゆみは重たげな二重瞼を開きかけた。「ゆみ、今回はお前の勝ちのようだぜ」

マサヤンの声の意味がわからず瞋をしばたかせる。

「おっ、きやがった——」

マサヤんと四郎が立ち上がってどこかへ駆けていく。

(逃げてる……?)

ゆみは思った。何からだ？ 当然、敵からだろう。彼らの敵は、すなわち私の味方だ。そうだ、助けにきたんだわ。私を救出にきたんだ。助かるんだわ、私！

ゆみは自分の位置を彼らに報せなければと大声を上げようとしたが、擦れカラカラの喉では声は出なかった。

その時、胸に小さな刺戟を感じた。さらにもう二回。今度は続け様だ。臍と、太腿にも何かが当たった。

冷たさ——。

忘れていた感覚が脳裏に閃く。途端に、身体のだこといちいち意識してられないほどの大量の刺戟が突き刺してきた。

それが雨という自然現象であることに、ゆみはようやく気がついた。彼女が経験している夕立などとはスケールがまるで違う集中豪雨のようなどしゃぶりだ。

渴き切った身体が十秒もしないうちにズブ濡れになった。火照りっ放しの肌が気持ち良く冷えていく。パサついていた髪がじっとり重くなって耳の後へと流れていっ

た。眼も開けていられないほどの勢いだったが、口はもちろん開けっぴろげである。味も何もわからない。しかし、たしかに水だ。水分だ。喉は確実に潤っていく。肌は皮膚呼吸を取り戻していくようだった。

味方が助けにきたわけではなかったが、ゆみは自分の運の良さを自覚した。それにこれは貴重な発見である。毎日規則的に襲ってくるスコールであれば、少なくとも逃亡した時の飲み水の心配はいらなくなる。

そうした思いを巡らせるほどゆみの気力は回復していた。

(絶対、負けないわ。絶対に)

何百回か、繰り返した決意をまた念じるゆみ。矯正院の屋上でX字型に磔られ、全裸にスコールを受けながら、この娘は不屈の闘志をたぎらせるのである。

結局、天日干しの責めはそこで中断されることになったらしい。

ゆみはあのスコールの中でいつのまにか気を失っていたのだ。

気がついたときはこの薄暗い『檻』の中にいたのである。

これはやはり『檻』に違いない代物なのだろう。高さが一メートルを少し越すくらいしかない。幅は二メートル弱。奥行もだいたいそれくらいの直方体の箱である。床を除いた面はすべて目の細かい金網が張られているの

だ。立つのはおろか、坐るのも窮屈な狭い檻の中にぶちこまれていた。

「目が覚めた？」

やや擦れた声がしてきた。ゆみが眼を凝らすとこの部屋の中には寸分違わぬ同じ大きさの檻がいくつか置かれていた。声はちょうど通路を挟んでゆみの檻の正面に置かれた檻の中から聴こえてきたらしい。眼が慣れるにしたがって、その檻の金網を通してボウーツと白い像が畑っているのがわかった。それが女体であるとすぐに察しがついた。ゆみと同じように全裸にされているのだ。

「誰？ あなた？ うっ、痛っ……」

身体を起こそうとしたゆみは灼けた肌のヒリヒリする痛みに貌をしかめた。

「あなたも天日干しにされたのね」

「そうよ。私は好本ゆみ。あなたは？」

「御免なさい。私の名前は田中。田中キャサリン。みんなはキャシーって呼ぶけど」

「あなたがキャシー……」

千江子やマサやんたちの会話の中にたびたび登場してきたハーフの娘である。激しく抵抗しているらしい。

ゆみの声にキャシーはフッフと小さく自嘲気味に笑っている。

「つまらない噂を聞いたらしいわね。するとあなたは新人さん？」

「ええ、今日、連れてこられたばかりよ」
キャシーが驚きの声を上げた。

「初日からここにぶちこまれたの！」
ゆみは船を下りてからすぐに脱走を企てた話をした。

「それは新記録ね。私でも逃げだしたのは連れてこられた次の日よ。あいつらの顔が眼に浮かぶわ」

キャシーは痛快そうに笑い声を上げた。

彼女はたぶん大柄な体格なのだろうとゆみは思った。揺すっている身体が金網にぶつかっている。ゆみでも頭がつかえそうな狭さである。白人の血を引いたハーフには窮屈この上ないだろう。

「マサヤんに唾を吐きかけたんなら便所小屋に直行したのもやむをえないわね」

「便所小屋？」

「そう。ここの名称。我々のような便所虫が入れられるから便所小屋——」

「……」

「フフ、来たばかりじゃわからないのも当然だ……」
と、キャシーはこの惨状を語りはじめた……。

便所虫の生活

この金翔矯正院の院生たちには、その矯正具合に応じ

て五つの等級がつけられている、とキャシーは言った。それはゆみが自宅から拉致される途中で矯正士の一人が喋った内容と同じである。一番上がレベル5で矯正が順調に進み、退院間近、社会復帰もすぐそこのランク。レベル1が一番下、まだ入ってきたばかりの新米の等級。

「本来ならあなたの等級がこれよ。だけど——」

と、ここでキャシーは胸にこみ上げてくるものを押さえるように一呼吸おいた。

「レベル1すら勤まらない不届き者……と彼らの言う、ようするに手に負えない不平分子が出た場合、正式な等級を剥脱されて人間以下の扱いをされるの。他の院生と隔離して家畜のように檻へ入れ、悔悛の情を見せるまでそこで飼育する」

その場所がこの巣窟——院から離れた別棟である。山肌を削り貫いたような造りで建物の奥半分は穴の中になる。島の排泄処分所でもあるので便所小屋と呼ばれている。

「処分所と言ってもね」

キャシーは続けた。

「穴を掘ってそこに排泄物を捨てるだけ。その作業が便所虫の、すなわち等級を剥脱された私たちの仕事というわけ。一日中、くる日もくる日も穴を掘り、排泄物の処理をやらされる。肥え桶担ぎね」

キャシーは他人事のように説明する。

「便所小屋では衣服の着用は赦されない。小さなハンカチが一枚、支給されるだけ」

「ハンカチ……」

ゆみは手探りで檻の中を探した。みつけたハンカチはまったく標準サイズの代物である。白地に何か刺繍してある。目を凝らせば『金』の文字がでかでかと――。

「愚劣だわ……」

「ふふ、これでもないよりマシだろうって言うのね」
股間を隠すのが精一杯のハンカチを投げ捨てるゆみ。

「ああっ」その彼女が声を上げた。「か、髪の毛が……」

ゆみは手で頭を押えた。頭髮がなくなっていると一瞬錯覚したのだ。

「大丈夫よ。三つ網にされているだけだと思おうわ」

キャシーの言う通りだった。髪は強引に真ん中分けされ、二つのお下げ髪にされていたのだ。

「それが便所虫のヘアスタイルってわけ。従順なxxを想起させる髪型から、己れの立場、目指す婦女子像を常に自覚するためだそうよ」苦笑するキャシー。

「私もされてる。見えるかしら。これでもセミロングのブロンドなのよ」

「こんな馬鹿馬鹿しいもの、取りましょうよ！ 従う必要なんかこれっぽっちもないわ」

「待って！」キャシーは慌てて叫んだ。「あなたの気

持ちは良くわかるけど……」

キャシーも何度、この仕打ちに逆らったかわからないという。監視の目を盗んで三つ網をほどき豊富な金髪の感触をうなじに、肩に取り戻そうとしたのだ。が、その都度、眼も眩むような折檻を受けた。天日干しなど子供騙しと思われるような拷問であった。

「あの矯正士たちの中には拷問のプロみたいのがいるの。そいつにかかったら、もうどうしようもない。とても口では説明できない陵辱も受けたし」

たしかにこんな屈辱的な処遇を拒否するのは正当なレジスタンスであるけれど、今のゆみは天日干しで身体が弱っているのを自覚しなければならないと、キャシーは諭すのだった。

「とにかく今は消耗した体力を回復させることが先決じゃないかしら。本格的な闘いをやりたいならそれからにしたほうがいいと思うわ」

冷静なキャシーの説得にゆみは髪に掛けていた指を放した。貌もろくに見えず、ほんの数分会話を交わしただけの相手なのに、ゆみはキャシーに自分と似た体質を感じていたし、それに加え、頼りにできそうな抱擁力も感じた。そう、中村久美子先生に抱いていた信頼感に近いものをこの囚われのハーフにも見いだしていたのだ。

「あなたはいったいいつからここに入れられているの。この金翔矯正院に」

ゆみの問いにキャシーはしばらく答えなかった。

「そう……」思い出すようにキャシーは言った。「もう一年になるかしら」

「一年！」と、ゆみはそのまま絶句する。

「十八歳の夏だったから、今は十九になるんだわ。

▲▲はとっくに卒業してどこかのカレッジのキャンパスで暮らしていたはずよ」

キャシーはそのまま身の上を話しはじめた。キャシーことキャサリンは父が日本人、母がアメリカ人でニューヨークで生まれた。十二歳まではアメリカで育ったが両親が離婚して日本に引き取られた。父親は日本の男性にありがちなマザコンで常に実家の意向を尊重するような男だった。離婚の真相もそんな所にあるのかもしれないが、アメリカ人の母ばかりでなく、自由なニューヨークで育ったキャシーも日本での暮らしには馴染めなかった。年齢が進むにつれて父親や家制度に反抗するようになったが、しだいに彼らは暴力を揮うようになった。思い余って家出したこともあるがすぐに連れ戻された。閉塞的な環境はキャシーを非行へと走らせ、暴走族に加わった時期もあった。対面ばかり重んずる家へのあてつけといった意識だけで、キャシー自身は甘ったれの日本の少年アウトローたちとの連帯感はなかったが、父親、祖父母の衝撃は大きかったらしい。キャシーはすぐに全寮制の管理主義的な女子校に入れられたのだ。

「どうもそこの経営者が金翔矯正院と繋がりがあった
ようね」

学校とは名ばかりの鑑別所のようなその女子校でもキャシーは反抗を繰り返した。当初は衝動的な行為が多かったが、やがて社会的意識に目覚め、イデオロギーに触れるようになるとレジスタンスも深化していった。寮の中でのオルグ、脱走の集団化、ストライキなどまるでゲリラのようだった。管理者側も黙ってはいない。あらゆる懲罰を科せてキャシーを鎮圧にかかったが無理だと知るやここへ送りこんだのだ。いい厄介払いができる親もすんなり同意したらしい。

「あれから一年……何十年も経ったみたいだわ。まだ二十歳前だというのにオバサンになった気分よ」

「……ひどいはそんなの……」

生い立ちこそ違え、ここに拉致されてきた事情は似通っている。ゆみはこの金翔矯正院とやらの全貌がわかりかけてきた気分だった。

「他の院生たちも似たような経緯で連れてこられたのかしら？」

「だいたい同じね。それにみんな美xx。全国各地にスカウト組織があるみたい。選りすぐりがここに集められて……」

「集められて？」

キャシーが言い淀んだのでゆみは聞き返した。

「——それはまだ言わない方がいいと思う。それよりあなたの事情を訊かせて」

キャシーのことだから何か考えがあるのだろう。ゆみはそれ以上質問せず、自分の一部始終を話してきかせた。

「そう、ママが市会議員……」

キャシーは母早苗の変化に関心を持ったらしい。早苗のおかしくなりはじめた様子をしきりに尋ねてきた。

「残念だけど」と、キャシーは結論づけるように言った。「あなたのママは脅迫されるか、洗脳されるかしたに違いないわ」

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

屈辱の再会

渥美脳神経科病院。午前十一時。

広瀬神経科長がエレベーターから地下病棟へ降り立った。

地下病棟はいつものことながら静まり返っている。棟へ通ずる鉄格子を開錠し、ワックスで磨き上げられたり

ノリウムの廊下に立っても物音ひとつ聴こえない。ここは重度の精神病患者だけが収容されている病棟なので、おかしい叫び声が聞こえてきても不思議ではないのだが、病室は全室個室、防音システム完備の気密さが異常性の流出を防いでいるのだ。精神病院が合法的に人間を隔離しておける数少ない民間施設として各界から重宝がられるのも頷ける。とはいえ渥美病院がこの需要を巧みに利用し莫大な利潤を上げているのを知る人間は当然ながら一握りである。フィクサー雁金誠一の絶大なる力が関与しているのは言うまでもないところだ。彼の人脈には消してしまいたい敵をもつ人種、それも大金持ちが掃いて捨てるほどいるのである。むろん、雁金自身の需要も満たされている。彼の場合、消したいと思う人間は本当に消してしまうので、ここを使うのはほとんど道楽の域を越えていないのだが……。

雁金の道楽によって幽閉された虜囚たちの病室はコの字形の棟の奥まった部分に並んでいた。

広瀬は分厚い扉の前で立ち止まり、眼の高さに作られている開閉式の観察窓を開けた。六畳くらいの病室は壁も床も天井も真っ白なのが常軌を逸している。壁と床はラバーが貼られている。昂奮した患者が体当たりしても怪我のないようにそうされているのだった。ベッドが一つきり置かれているだけのあまりにシンプルな部屋。人格が壊れた、いや、壊された人間にとってはそれで十分

ということなのか。こんな所に閉じこめられればどんな正常な人間でもおかしくなるに違いない。

病室の床に、中村久美子が慄然として正座していた。

半袖のパジャマ姿の彼女。二十八歳の伶俐な美女、中村先生はセミロングだった艶やかな黒髪を稚気な三つ網のお下げ髪に縛られていた。貌はかなりむくんでいる。寝不足と精神治療の名目で投与される向精神薬の副作用のせいだ。白目に血管が走るように充血している。

彼女の前に佐々木加奈江婦長が仁王立ちしてガミガミ叱りつけていた。

「何度言われたらわかるんだい、お前はっ。朝、職員が入ってくる前に居住まいを正し、正座して待機しているんだろ！　そして入ってきたら土下座して朝の挨拶をはじめるところが！　良き患者の心得を忘れたんじゃないだろうねっ、言ってみなさい！」

「……医師先生様、看護婦先生様に好かれる良き患者。敬い尊び従います。逆らいません、治るまで……」

ここに連れてこられてから朝な夕なに必ず叫ばされる患者心得なる珍妙なお題目だ。もちろん久美子は馬鹿馬鹿しくて仕方のない貌で、棒読みの気のなさである。無抵抗の素直さがかえって加奈江のヒステリーに対する抗議の証だろうか。

「フン、そんな態度で通ると思ったら大間違いだよ、この色ボケ女！　今日もたっぷりシゴキ、いや治療して

やるからね！」

加奈江の剣幕に苦笑しながら広瀬は分厚い扉のオートロックを解除した。

「いや、婦長、お早よう——」

広瀬の来訪に加奈江は軽く一礼し、久美子の頭を小突いて挨拶を催促する。久美子は広瀬に一瞥をくれ、ぶり返してくる噴辱に憎悪の表情を垣間見せたが、太たく視線を外し、さっさと土下座して切り口上の挨拶を口にするのだ。

「お早ようございますっ、広瀬先生様。先生様のような名医に診察して戴けるなど、恐れ多い事でございますっ」

ほらほら、頭が高いと加奈江は久美子の後頭部を踏みつけた。リノリウムの床に額が密着する。平蜘蛛の如き土下座で久美子はいいいと言われるまで挨拶を繰り返した。

「院長は福岡に？」

「そう、今、羽田まで送ってきたところですよ」

広瀬は加奈江の問いに答える。

病院長、渥美宗雄は今日から学会があり九州へ立っていた。この時期、毎年恒例だが今回はタイミングが悪い。おかげで広瀬が本日の用意を整えなければならない。ただ久美子を雁金邸へ送り届ければいいのだが、やはりあの怪物に会うのは緊張する。彼が機嫌を損ねれば

こんな病院などすぐに消し飛ばされてしまうのだ。厄介な役目を自分に任せて院長はと、恨みの一つも言いたくなるところではある。

(ま、中村久美子を甦る役得で憂を晴らすさ)

広瀬はようやく頭を上げることを赦された女教師の美貌を眺める。

「調子はどうなんだ、久美子先生？」

広瀬は久美子の傍らに腰を屈め美しいラインを持ったあごを手にとって左右に向かせた。

「いいわけ……ないじゃない……」

ふと、疲労した表情を浮かべ、捨て鉢に言う久美子。

「少し、眠らせてほしいわ」

「ほう、まだ不眠症が治らないのか。ちゃんと薬を飲まないからだぞ」

「……よくも……白々しい……」

怒りを抑えるのがやっとなのである。久美子は広瀬を睨みつける。

「こら！ なんだい、その貌は！ すみませんねえ。最近、この娘はすごく怒りっぽくなって」

「うむ、ヒステリー症状が悪化しているんだな。よくない兆候だ」

「私は病気なんかじゃない。早くここから出しなさい」

もう何百回言ったかわからない科白だが、反応もまっ

たく同じである。

「自分を病気じゃないと思うのは、精神病患者特有の症状だぞ、久美子先生。それではますますここから出すわけにはいかないな」

広瀬はニタつきながら久美子のパジャマのボタンを外しにかかった。一瞬、はっとして表情を強ばらせる久美子だが、すぐに諦めたようにそっぽを向いた。診察という大義名分で身体をまさぐられるのは日常茶飯事である。胸や臀部、ときには性器にまで毒手が伸びてくる。当初は激しく抵抗した久美子だが今は羞恥心も麻痺していた。

中村久美子が権藤一派の卑劣な罠にかかり、職業的なノイローゼが誘発した多淫症、などとでっちあげられ、措置入院の名目でここに連れてこられたのがちょうど一週間前。それからこの窓もない監獄のような一人部屋に閉じこめられ、日毎、わけのわからない注射や薬を処方されている。それが女の身体を墮落させるものであるのは久美子にもわかっていた。気がつくと下着が汚れている。最初、失禁したのかと思ったほどの多量の腔分泌液がシミこんで、陰毛の翳りが透けて見えてさえいたのだ。夜は夜で鼻を摘まれ口中に流しこまれる昂奮剤のおかげで、頭はカチカチに冴え渡り、ほとんど眠れない。最近では日中でも意識にぽっかり穴が開いたようにわけがわからなくなる時がある。眠りこんでいるのか、強い

薬の副作用による失念なのか、自分が何をやっていたのか思い出せないのだ。そういった場合、パジャマの上着の前が肌け、ズボンのゴムの位置が尻たぶまで下がっていたりする。乳頭が充血し、硬くシコリ、女陰の肉が熱く火照って陰毛がケバ立っているところをみると、我を忘れてマスターベーションに耽っていた可能性が強いのではないか。

これでは本物の色情狂にされてしまう……彼らは寄ってたかって私を一生、ここに監禁しようというのか……

久美子は恐怖に耐え切れず、事あるごとに暴れるようになったが、その都度、厳しい拘束衣を着せられたり、昨晚のように逆海老縛りとかいうSMチックな緊縛を受けたりして懲らしめられている。暴力的なのは症状が悪化している証拠だと、ここ二三日は薬の量が増やされる始末だ。

「……早く治って社会復帰したいだろ？　また奉職して子供たちの元気な笑い声が聴きたいんじゃないのかね、久美子先生？」

「……」

パジャマを肌け、ブラジャーの赦されていない素の乳ぶさをタプタプ揉みながら広瀬は尋ねる。Dカップ一歩手前の美乳。乳輪の色もほんのりピンクに染まっている。

その乳ぶさをこったり揉まれても久美子は表情一つ変

えずに黙殺を演じる。

「オッパイを愛撫されているのに鉄面皮を決めこめるのは多淫症だからこそその反応だぞ」

などとからかわれても一切相手にしない。

「ケッ、無理しやがって。鼻の頭に汗掻いてるくせに」

そう言いながらシゴく手を荒々しくする広瀬。

(こりゃ、少し催淫剤を多めに調合した方がよさそうだな)

雁金誠一に差しだす前に、あまり調教しすぎるのはいかがなものかと渥美院長に忠告されていたので、きつい媚薬は控えていたのだが、少し甘やかしすぎたかも知れぬ。これでは雁金の面前でどんな不始末をしでかすかもしれない。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

便所虫は眠れない

雁金邸の庭に響きわたる陰惨な奴隷心得は、形を変えてはいるけれど、この南海の孤島においても一日の始ま

りを告げる時の声だ。

一番鶏は別棟に囲われている二羽の若鳥。

いや、ここでは便所虫の蔑称で呼ばれている。

好本ゆみと田中キャサリンは肩を並べて土間に正座させられていた。眼の醒めるようなブロンドと塗れ羽色の黒髪が同様にお下げ髪にされている。▲▲生とは思えないゆみの豊満な双乳。さらに一回り勝るキャシーの巨乳。違うところがもう一つある。肌の色だ。白人との混血で、炎天下の労務でもさして日焼けは見せないキャシーの色白と違い、ゆみのそれはこんがり小麦色に焼けている。着いた早々の脱走の罰の天日干しに表裏、跨のつけ根までばっちり南国の太陽に曝された彼女の肌はその気の強さを象徴するような浅黒さを見せて、精悍ささえ漂わせているのだ。ただローションを塗られたわけでもなく、事後の手入れをするわけでもないのに、所々火ぶくれになっているし、皮が剥けてささくれだってもいた。

「おめえーら、タラタラしないで、気合い入れてけよ、気合ーい」

ゆみ担当の矯正士、四郎が生欠伸を噛み殺しながら間延びした声で命じた。マサヤンはまだ来ていない。朝は苦手らしく、もっぱら四郎がその任を引き受けいるのだ。夜な夜なキャシーを姦しにくる長次はそれ以外はほとんど姿を表さない。きっと夜警としての任務なのだろ

う。

「よっしゃ、始めエ！」

四郎のハッパが轟いた。

二人——とくにゆみ——はこれ以上ないような仏頂面で院生心得なる愚かな文句を口にしはじめる。

「我らがめざす優良婦女子。無能未熟な我々が、二十四時間努力して、やっとなれるよ、優良婦女子。優良婦女子になるまでは、粉になろうといといません。砂になろうと恨みません……」

ゆみがここに連れてこられて三日が経つ。毎朝繰り返されるこの馬鹿馬鹿しい宣誓だが、こうして辟易としながらも逆らわずに唱えているのは、『天日干しで消耗した体力が戻るまでは余計な摩擦は避けるべきだ』との先輩キャシーの忠告に従っているからだ。それにしてもゆみのふくれっ面は口とは裏腹に不満タラタラの露骨さで、これでは猫をかぶっている意味がないくらいである。

そのゆみの貌、化粧どころか、洗顔さえ赦されていないために生々しい肌があらわで、なおいっそう、雰囲気はザラついていた。絶海の孤島では生水は貴重品であるという理由で院生の水使用は厳しく管理されている。とくに戒罰生である二匹の便所虫に贅沢させる理由はないと、洗顔は三日に一度、入浴は湿度の高い熱帯地方なのに十日に一度の少なさだ。もちろん、五日おきに本土か

ら水の補給は受けているし、スクールだって結構あるのだから、水不足は院生たちを管理する口実である。一日に二回はシャワーを浴びていなければ説明がつかない矯正士たちのすがすがしい顔が証拠である。その事実にも早くも気づいたゆみが無然とするのも頷ける。

「好本、お前毎日、そんなツラしてたら、ますますブスになるんだぞ、え？」

四郎が小憎らしそうにゆみのお下げ髪を引っ張る。この少年、ゆみをブス、バカ、デブ、呼ばわりするのが心地良いらしく、一日中その連発である。

「少しは楽しそうに笑ったらどうなんだ、このバカ」

しかしゆみは挑発には乗らず無視する。四郎はさらにネチネチとゆみの頬にできたアズキ色の吹出物をつつき、皮をポリポリと剥がしながら、あごでキャシーを指すのだ。

「それともあれか。毎晩、キャシーと長次の新婚生活にあてられて、むくれてるのか」

四郎の言葉にキャシーはキリキリと奥歯を噛み締めた。膝に揃えた拳に力が入っている。いつもはゆみと同様、毅然としているキャシーだが、長次の話でからかわれたり長次本人が現れるとまったく別人のように混乱する。

ゆみは眼を見開いて四郎を睨みつけ、何か言いたそうな表情になる。しかし、必死にコンセントレーションに

努めている様子。この三日間、キャシーはゆみの目の前で長次に気も狂うセックスをブチかまされていた。必死に耐えようとするキャシーだが、結局、いつも同じように肉の敗北を喫する。キャシーが泣きながら言うところを聞くと、毎日は珍しいらしい。たぶん新入りのゆみへの教育効果を狙っての時間割なのだろう。望んでこうなったわけではないとはいえ、自分のせいでそんな目に遭っているキャシーに、ゆみはもちろん責任を感じていた。だから四郎の言葉に自分のことのように憤慨する彼女だが、それを口にしてしまっただけでは厳しい戒罰が待っているのである。

「好本も欲求不満で悶々として、デブのオッパイ尖んがらかしてんだろ。処女だってハメたい時はハメたいよな」

四郎は喉で笑いながらバーカとゆみの頭を小突き、立ちあがる。

「よーしっ、それじゃ乳房マッサージの時間だ！ 背筋を伸ばして今日も頑張ってチョウよ！」

四郎が怒鳴りつけると、二人はげんなりしたように唇を噛んだ。心得斉唱と並んで朝の日課の一つがこれだ。

乳房マッサージ——胸乳を自らの手で揉みしごく行為である。男に好まれるような豊かなバストに発育させ、女本来の仕事である出産、育児に今から備えるといっ
て、毎朝十分間、『365歩』ならぬ『365乳のマー

チ』に乗せてやらされている。これも優良婦女子になる一つの条件なのだ。

四郎がホイッスルをくわえて耳をつんざく音を吹きだし、今時珍しいドーナッツレコードをかけると、大音量のマーチが響き渡った。

二人はしぶしぶ、肘をぶつけあうように張って、アンダーバストに手のひらを添えた。これを拒むと数人の矯正士に取り押さえられて、彼らの手で揉みぬかれる様になっているのだから仕方がない。それなら自らの手でマッサージする方がいいに決まっている。

”それ、ワン・ツー、ワン・ツー、休まないで、ば、れえー”

演歌歌手のキンキンした声が反響する。四つの美乳が白くて長い指を食いこませ、軟らかく変形していく。やはりゆみの揉みはたどたどしい。ドヤされるのでむっくりむくれだすほど根を搾っているが、キャシーのようにユサユサと、というわけにはいかない。どうしても萎縮してしまう。処女とはいえ、ゆみだって発育たしかな十八歳。それも精気溢れる早熟娘である。こんな行為でも十分も続ければ可憐な乳首は硬くなるし、きっと乳暈だって赫くなっているだろう。発情状態を朝っぱらからつくりだすのがこの乳房マッサージの狙いの一つであろうとは容易に想像できる。事実、終えた時点で、たっぷりと助平汗を掻き、艶かしい息遣いになり、美しいピンク

色の乳輪の面積を広げたキャシーは矯正士たちに散々からかわれるのが日課なのだ。ゆみにはまだそれよりも四郎にバカ呼ばわりされて制裁棒による院生義務不履行の罰——尻叩きを食らわせられる方がマシに思える。もっとも累犯は罰則が重くなっていくので痩せ我慢にもおのずと限界があるだろうが……。

二人の巨乳院生は鼻の頭に玉の汗を浮かばせながら、マッサージに没頭している。

「もっと強く！ もっと大きく！ 乳首からだけでなく、乳輪全体からミルクが噴き出すような優良乳房めざして、一時たりとも気を抜くな！ コラァ、好本オ、何度言われたらわかるんじゃ！ そんなヤワな揉みじゃ、男に好かれるチチには育たんぞ！ 気合い、入れろっ、気合いを！」

四郎の怒声とワレガネのように響く『マーチ』がガンガン錯綜して便所部屋は異様な空気に包まれていく。

それにしても四つのボリュームたっぷりの乳房が刻々と形を変える様は何度見ても飽きがこない。日本広しといえどもこんな美人でボインちゃんの揉み姿で、朝勃ち出来るのは自分くらいだろうと四郎は助平笑いを浮かべるのである。

マーチの最後のリフレインのところでは、双乳を左右交互にギュッギュッと揉みしごいて終るのだが、まさに圧巻である。その頃までにはほんのりとピンク色に染ま

っている美乳は根がくびれて乳頭部を拳大に膨張させて、まるで牝牛の搾乳のような様を呈する。女たちもハアハアと息を乱し、頬を紅潮させて身体の火照りをあらわにする。明け方近くまで長次の変態セックスに戯かされ通しのキャシーには辛い務めだろう。アングロサクソンの血の混じった白い肌はテカテカと汗ばみ、ぴっちり閉じていた逞しい太腿が開き気味になっている。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

暴れ狂う鞭

追跡劇は夕暮前に終幕を迎えた。

赤色化した太陽が帰還する追跡部隊の行進を照らしている。ジャングルから出、そこそこ整地された道をお手柄の犬を先頭に歩いていく。

その中段に二匹の獲物が連行されていた。頸に縄をかけられ数珠繋ぎにされ、今度は後手にきっちり手錠を掛けられている。

前がゆみ。後がキャサリン。

どちらも身体中汚れ切っている。ゆみの貌がいくぶん

腫れているのは捕獲時に暴れた報いである。キャシーの貌はそれほどでもない。彼女にしてもかなりの抵抗はしたのだが妊娠しているのはすでに知れわたっているらしく扱いは乱暴ではなかった。そのおかげでゆみは二人分殴られた感がある。連行の途中でも面白半分に蹴りが入るのはもっぱらゆみの臀部だ。きらきらと光る瞳を暴虐者へ向けて悪態をつくゆみ。その小麦色の貌めがけて平手打ち。ざっくりとロングヘアが貌を隠し胸にかかる。それをうるさそうに頸を振って払い、ちっともめげない反発を示す。もう何分も前から繰り返されている光景だった。

屈強の男たちや犬の足はもちろん女二人の足よりも速く、しかも多勢に無勢である。ゆみとキャシーは知らず知らずのうちに彼らの包囲網に入ってしまったのだ。後はジリジリと狭められて、一気に襲いかかられた。血相を変えたマサヤンがその先陣を切ったのは言うまでもないが、四郎の姿が見えなかったのはどうしたわけか。マサヤンとともに真っ先に駆けつけなければ面目が立たないだろうに……しかし彼の姿は今になっても現れないのだった。

矯正院の本棟に到着すると追跡隊は三々五々解散したが、ゆみとキャシーも引き離されることになった。ゆみはそのまま便所小屋に、キャシーは曳地千江子がどこかに連れていこうとする。

「キャシーをどこに連れていこうっていうのよ！」
ゆみはマサやんに首縄を引かれながらも必死に脚を踏張ってそう叫んだ。

「お黙り！」

曳地矯正部長が鬼女丸だしの形相でゆみを叱りつける。

「田中はね。これから特別な修業を積むことになったのよ。お前のような癩癩持ちと一緒にしてたら胎教に悪いわ。もっと環境も食事もいいところでゆっくりと今後の身の振り方を勉強するのよ。私がつきっきりでね」

ホホホホとけたたましく笑う千江子にキャシーの貌が引きつる。

「ああ、恐いわ。ゆみ、ゆみ！」

「キャシーっ、頑張るのよ！ 希望を捨てちゃ駄目よ！」

呼びあう二人にマサやんは冷笑を浴びせた。

「バーカ、他人の心配をしている暇なんか、てめえにはないんだよ。キャシーが便所小屋からいなくなったら長次はどうすると思う？ え？」

ぎくりとするゆみ。

「ヒヒ、おっかねえぞ。惚れた女が居なくなったらどう暴発するかわかりやしねえ。はけ口は残っている女に向けられるのが普通じゃねえのか、ン、好本よお」

頭を小突かれながらゆみは唇を噛み締めた。連夜繰り

広げられたキャシーと長次の壮絶な肉交が脳裏に浮かんできた。さしものゆみも脚が竦んでしまう。

「大丈夫よ、ゆみ。あなたは処女なんだから長次が手を出すわけではないわ。心配しないで」

今度はキャシーがゆみを励ます番だ。しかしそれもすぐに終わりを告げる。キャシーは曳地女史に引きずられて本棟の建物に連れこまれていった。遠くなるキャシーの悲鳴を聴きながらゆみは首縄で促すマサやんに観念したように従った。

「ケッ、てこずらせやがって。たっぷりとヤキを入れてやるからな。覚悟しろ」

忌ま忌ましそうに彼女の二の腕を抓りあげる。うっと呻いてじろりとマサやんを睨みつけるゆみだが、それ以上はかまわず、自分からすたすたと便所小屋へ歩いていく。

「そうだ、四郎はどうしたの？ 見えなかったけど、まさか良心の呵責を感じて逃げだしたわけじゃないでしょうに」

「うるせえ、つべこべ言わずにとっとと歩くんだっ」

マサやんのイライラぶりをみるとやはり何かが起こったのだ。それが何かは想像する由もないが、ゆみは次の脱走計画に少しでもプラスになるでき事であることを願わずにいられない。

便所小屋はサウナのような蒸し暑さでゆみを迎えた。

「脱衣してそこに正座しな」

とマサやんの声が陰湿な低音に変わった。ゆみは懽然としながらブルマとシャツを脱ぎ、それを脱衣籠へ投げ入れる。痣だらけのヒップ。汗ばんだバスト。綺麗な臍が息を詰めているように窪んでいる。

ゆみは膝を折った。床板までが灼熱と化しているようだった。

マサやんはゆみの手錠を外した。そしてどこからか太い荒縄を持ってきた。

「……」

「なんだ、その貌は。罪人に縄をかけるのは当然じゃねえか」

マサやんは爛々と瞳を輝かせて縄をしごいている。

「公然と変態がやれて良かったね、マサやん」

「すぐにそのへらず口、後悔させてやるぜ」

マサやんはゆみの背後に回ると、素早く彼女の華奢な両腕を背中へねじ曲げた。

「あうう……」

高くねじあげられ、ゆみはがっくりと頭を垂れて奥歯をきりきりと噛んだ。

両手首を交差させて束ねるとぎっちり縄を通して縛っていく。長く余ったそれは前に回して胸乳の上に巻きつけた。もう一度背後に返し、緩みを追いだすとさらに前に戻して今度は胸乳の下へ通して肉丘を持ちあげる。

「むむむ」

それを二度三度と繰り返すと乳ぶさは縄に挟まれ、搾りだされるようにいびつに変形した。

「どうだ、高手小手縛りの味は。万更でもない表情じゃねえか」

マサヤンはほくそ笑み、鼻先に芳香をかぐわせるゆみの黒髪を掻き分け、最後の縄尻を頸に持っていくと、肩に背負わせて胸へ垂らし、乳ぶさを戒めている縄に連結させた。上下から挟まれ、谷間を強調するように縄掛けされると根がくっきと締めつけられて、呼吸すらままならないといった感じであった。

「若いってのはいいなあ、好本。生まれて初めてってのがまだ一杯あるんだからよ。羨ましいぜ」

さしものゆみも緊縛されたショックにぐうの音も出ないといった風情なので、マサヤンは痛快である。爪が食いこむほど握り締められている拳が彼女の悔しさを表しているようだ。マサヤンは背中中の縄を掴んで立ちあがらせる。ふらふらとよるめきながら従うゆみ。

この便所小屋の天井には太い鴨居が縦横に走っていてどのようにでも人間を吊せる。老矯正士は慣れた手つきでゆみの両手を後縛りしている縄にもう一本のロープを結わえ、鴨居に投げつけた。鴨居と天井の空間をくぐってこちらに落ちてきたロープの後端を壁の柱にぐるぐる巻きしてグイと引けば、ゆみの身体が吊りあがる。

以下は有料本編でお読みください。
#####